

2013年度人間学研究所主催公開シンポジウム
共催：京都文教大学人間学研究所共同研究プロジェクト
「大学教育の視点から本学の教育を考える」

「日本の大学、このごろ焦ってませんか？
～『社会に役立つ大学』の価値を問う～」

日時：2014年2月11日（火・祝）14：00－16：30

会場：キャンパスプラザ京都 第4講義室

<シンポジスト>

藤本 夕衣（東京大学 大学総合教育研究センター特任研究員）

藤田 尚志（九州産業大学 国際文化学部 臨床心理学科 講師）

井上 義和（帝京大学 総合教育センター 准教授）

<開会あいさつ> 鑓 幹八郎（京都文教大学学長）

<閉会あいさつ> 平岡 聡（京都文教大学副学長）

<司会・コーディネーター> 黒宮 一太（京都文教大学総合社会学部専任講師）

京都文教大学人間学研究所 公開シンポジウム
共催：京都文教大学人間学研究所共同研究プロジェクト「大学教育の視点から本学の教育を考える」

日本の大学、このごろ焦ってませんか？

～『社会に役立つ大学』の価値を問う～

いまの大学では、「社会に役立つかどうか」が最大の課題。その答えは簡単には出てくれない。でも、その答えを問うことは、大学の存在意義を問うことでもある。その答えを問うことは、大学の存在意義を問うことでもある。その答えを問うことは、大学の存在意義を問うことでもある。

●パネリスト●
藤田 尚志 先生（九州産業大学 国際文化学部 専任講師）
専攻：フランス近代思想
「大学の時間」
井上 義和 先生（帝京大学 総合教育センター 准教授）
専攻：大学教育論、歴史社会学
「参加の時代から参加型の時代へ」
藤本 夕衣 先生（東京大学 大学総合教育研究センター特任研究員）
専攻：大学教育論、教育思想
「現代の『社会』における『大学』とは？」

●開会あいさつ● 鑓 幹八郎（京都文教大学学長）
●閉会あいさつ● 平岡 聡（京都文教大学副学長）
●司会・コーディネーター● 黒宮 一太（京都文教大学総合社会学部専任講師）

2014年
2月11日（火・祝）
14:00-16:30（開場は13:30）
会場：キャンパスプラザ京都 第4講義室

●入場無料・申込み不要●
（定員はありです。満席の場合は入場を断りさせていただきます）

黒宮一太：どうも、皆さん今日は寒いなか足を運んでいただきまして、誠にありがとうございます。ただいまより、2013年度京都文教大学人

間学研究所主催公開シンポジウムをはじめたいと思います。本日、司会進行役を務めます京都文教大学総合社会学部の黒宮一太と申します。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

正直申しまして、今日こうやって会場に足を運んでみるまで、何名の方に来ていただけるか非常に心配しておりました。ひょっとしたら数名の方しか来てくださらず、ゼミ形式で顔を突き合わせて議論することになるのでは、それもまた面白いかもな、などと思っていたほどです。ところが、僕の予想をはるかに超え、大勢の人に集まっていただき、非常に感謝しております。ちなみに、大学教育をテーマにしたシンポジウムですから、会場にいらっしゃる方の多くが大学の教職員の方、または学生の方でしょうか。いや違う、という表情をされている方も少なくないようですね。どうやら最近では、大学教育が大学外の方からも注目を集めているということなのでしょうね。それはともかく、本日のシンポジウムの趣旨など、詳しい内容につきましては後ほどあらためてお話しするとしまして、まずはそれに先立ちまして、本学学長の鑓幹八郎より、皆さまに開会の挨拶をさせていただきます。

ます。鑑先生、お願いいたします。

鑑幹八郎：皆さんこんにちは。今紹介いただきました京都文教大学の学長を務めています鑑と申します。どうぞよろしくお願いします。

今日は、「日本の大学、このごろ焦ってませんか？」という、ちょっと刺激的な題になっておりますけれども、中身は非常に硬い話になるのではないかというふうに期待しております。

京都文教大学には人間学研究所が創立以来ございます。毎年このような一般に関心の高いテーマで先生方にお集まりいただいて、シンポジウムを開かせていただいております。昨年もたくさんお集まりいただいて、大変興味深いシンポジウムをこの場所で開かせていただきました。

今回は、この大学教育のあり方についての話ですが、われわれとしては、最も本質的な問題について話し合いができるというのを大変うれしく思っております。大学の問題というのは、京都文教大学はちっちゃな大学ですけれども、同じように、やはり経営・運営については、非常に苦慮しているところです。日本全体において、大学の問題というのは、今非常に難しい岐路にあるのではないかと思っております。

こういう中で、大学に関するさまざま研究をされている若い3名の先生をお招きして、シンポジウムを開くことができるというのは、意義深いと思っています。これからの日本の大学の現状をしっかりと見ながら、将来どのようになっていくのかと。今進んでいる方向が実学主義というかたちですすみ、本来大学のあるべき姿と違うのではないかというようなことが、私自身の実感でもあります。これらをどのように認識しながら、次の大学の将来に向かって展望を開くかということが、今回のシンポジウムの大事なところではないかというふうに、私は思っております。

そういう意味で、このシンポジウムが実りあるものになるのを期待しております。今日は皆さまお集まりいただきまして、ほんとにありがとうございます。どうぞよろしくお願いします。(拍手)

黒宮：鑑先生、どうもありがとうございました。

では、あらためまして僕から、簡単にではありますが、本日のシンポジウムの趣旨を説明いたします。その前に、本日のシンポジウムの流れを確認しておくことにします。まず前半部で、後ほど紹介いたします3名の方に、それぞれ20分程度問題提起をしていただきます。その後15分ほどの休憩を挟みまして、後半部は、前半部で提起された論点について、僕と3名の方とで1時間ほどディスカッションをします。ディスカッションでは本日来てくださっているみなさまからの質問、意見を参考にして議論を進めたいと考えておりますので、差し支えなければ、質問内容の追加説明をお願いすることもあるかもしれませんのでご記名のうえ質問カードを提出していただければと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

では、本シンポジウムの趣旨、僕なりの問題意識を話します。先ほど鑑学長からも、本日のシンポジウムのタイトル、「日本の大学、このごろ焦ってませんか？～『社会に役立つ大学』の価値を問う～」にかんする言及がありました。おそらく想像するに、ここに来てくださった方のほとんどが、このタイトルをご覧になって「何や、これは」と、興味を示してくださったのではないかと思います。どなたかは申しませんが、前にいらっしゃる方の中の1人からは、「何とも大胆なタイトルで、貴学に敬服いたします」と「お褒め」の言葉を頂戴しました。

じつは人間学研究所は、この「大胆さ」を「売り」にしているんです。今日は所長も来ていますので、「黒宮くん、それは違うぞ」と言われてしまうかもしれませんが、僕はそのように理解しています。実際、ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、昨年度は「春画」をテーマにしたシンポジウムを開催しました。この国の大学では初の試みだったようですね。そして今年度は、「大学、このごろ焦ってませんか？」などと「挑発的」なタイトルを付けてしまいました。ですが、単なるアジテーションではありません。すこし真面目に、大学教育の議論において近年流行している教育方法論や制度改革論ではなかなか問われることのない「大学とは何か」とい

うことを議論したいと思っています。

といいますのも、非常に厳しい環境の中に置かれているいまの日本の大学には、いくつかの「焦り」が見られるのではないかと考えるからです。それは何より、「人材育成」への焦り、といつてよいでしょう。

一方で、グローバル化の進展にともなって国家間の競争・対立が顕在化してきたなかで、その競争に生き残るために必要な「グローバル人材」の育成という役割を大学が担うことになっています。その背景には、優秀な人材の国外流出を食い止めようという狙いもあるのでしょうか。優秀な高校生から日本の大学が選ばれないという事態も生じているようです。ご存じの方も多いと思いますけれども、「グローバル30」でしたか、いくつかグローバル人材育成事業を積極的に進めるような大学が選ばれて、そこに対する支援事業が国によって行われています。

その他方で、近代化、すなわち合理化の進展の帰結として、たとえば、高卒労働力への需要が低下し、いまや大学進学者が同一年齢人口の50%に達しています。いわゆる「大学のユニバーサル化」、または「大学全入時代」への突入が指摘されています。それにより、大学では、大学での学習に対する準備が不十分な学生、学ぶ意欲・関心が低い学生が大量に入学し、学生の「大学教育への志向」の変化に即応しようと「教育改革」に必死です。いずれも、「社会に出て役立つ」教育を提供することが、いま大学には求められているのです。

しかしながら僕は、「社会に役立つ」などと言うこと自体、すこし躊躇してしまいます。といいますのも、僕が専門にしている学問をしいてあげるとすれば「政治思想」「政治哲学」「社会哲学」になりますが、ひょっとしたら僕は、生きるために最低限の知識以上の、あるいは以外の学問・知識に携わっており、そのために多くの時間を費やしているのではないかと、そうだとすると、やっていることは「余計なこと」なんじゃないかと考えているからです。僕は、この社会からすれば「余計者」なのではないかと言うこともできるわけです。実際、僕は、大学4年間を終えて大学院に進学し、15年もの間勉

強してきましたが、その間、親父や祖父、伯父などから、「いつまで勉強しているんだ、はやく働いたらどうか」と言われつづけてきました。ですから、いまだに大学で学問をやっている僕は「余計者」ということになるのでしょうか。そういうわけで、僕は、そんな「余計者」として存在していることへの「気まずさ」「気恥ずかしさ」のようなものが、つねに消えません。「社会に役立つ」なんてことを言うこと自体、非常に気恥ずかしいんです。

しかも、あろうことか、「余計者」である僕ら大学人は、4年間も「社会」の生産活動から離れて過ごすことを推奨し、毎年多くの学生を大学に招き入れています。「余計なこと」を周りの多くの人に勧めているんです。それも、小声でならともかく大声で。そして、「余計者」であることを推奨しておいて、いまの大学では、「社会に役立つ」教育を提供しています、などと言って、教育「改革」に精を出している。「余計なこと」をやっているという自己不安を慰撫、払拭させようとしているのでしょうかね。いずれにしても、僕はここに「違和感」を感じずにはいられません。

そこで今日は、僕のこの「違和感」をすこしでも「言葉」にしたいと思い、とにかく「焦り」から拙速に即効性のある教育方法論や制度改革論を求めがちななか、それらとは趣を異にする大学論を展開してくれるであろう3名の方に来ていただきました。前に座っていらっしやるので、面倒ですが立ち上がってもらいましょう。発表順に紹介いたします。まずは藤本夕衣さんです。チラシをお持ちの方もご覧になっていただければ分かるように、現在、東京大学の大学総合教育研究センターで特任研究員を務めてらっしゃいまして、ご専門は大学教育論、教育思想です。つづいて、藤本さんの右側、皆さんから向かって左側が藤田尚志さんです。藤田先生は、九州産業大学国際文化学部の専任講師をされておりまして、大学教育論のシンポジウムなのになぜ、と思われる方もいらっしやるかもしれませんが、フランス近現代思想を専門とされています。そして、皆さんから向かって右側が井上義和先生です。現在、帝京大学総合教育セ

ンターの准教授でいらっしゃる井上先生は、教育社会学、歴史社会学を専門とされています。井上先生には、本日のトリを務めていただこうと思っております。

以上、僕も含めて、40歳前後という、大学では「若手」になるらしいですけれども、4人で少し真面目に「大学とは何か」という議論をしていきたいと思いますので、2時間半もの長い時間になりますが、どうぞ最後までお付き合いください。

では、早速ですけれども、まずは藤本夕衣さんから話をさせていただきます。藤本さん、よろしくお願いします。

「『社会』にたいする『大学』の責任を問う—『アカウンタビリティ』という責任回避—」
藤本夕衣（東京大学 大学総合教育研究センター 特任研究員）

藤本夕衣：ご紹介にあずかりました藤本と申します。よろしくお願いいたします。先ほどから今日のシンポジウム全体のタイトルが話題になってますが、このチラシにあるように、最初私は、「現代の『社会』における『大学』とは？」というタイトルでお話させていただこうと考えていました。でも、このチラシを見ると、どうも全体のタイトルに比べて、自分のタイトルが少し地味だなと思ひまして、せっかく挑戦的なタイトルを付けていただいてお話するのであれば、もう少し私も挑戦的にいきたいと思い、変

更させてもらいました。「『社会』にたいする『大学』の責任—アカウンタビリティという責任回避—」というタイトルで、今日はお話したいと思います。

先ほど少しご紹介いただきましたけれども、私は今、東京大学の大学総合教育研究センターというところで、大学教育を改善するプロジェクトの下働きをしております【スライド1】。東京大学では今年度より、大学院生向けのプログラムを始めています。将来、大学の教壇に立ったときの心構え、シラバスの書き方や授業デザインの方法など、そういった内容を指導するプログラムの補助をしています。

東大の仕事はこれで2年目になりますが、それ以前も同様の仕事をしていました。京都大学の高等教育研究開発推進センターで4年半、いわゆる教育改善、FDといわれるプログラムの下働きをしてみいました。そのように、今の大学改革の片棒を担ぐというか、片棒を担ぐというほどもしてなくて、片棒担いでいる人の足元の泥をぬぐう、といったぐらいのことをずっとしてきました。

一方で、研究のほうでは、私は今の大学改革の動向に対して非常に批判的な立場を取っています。今の大学改革では、どちらかというと軽視されている「教養」とか、あるいはもっと具体的には、「古典を読む」といったこと。そうしたことにどのような意義があり、現代の大学においてどのような意味を持ち得るのか、ということ、ずっと問い続けてきました【スライド2】。今日は、「大学改革の片棒を担ぐ人の足



スライド1



スライド2

元の泥を払う」ことで見えてきた部分と、あとは研究でずっと問い続けてきた部分と、この両面から、大学と社会のかかわり方、その責任とということを問い直してみたいと思います。

「象牙の塔」から「社会に開かれた大学」へ

「大学と社会の関係」を考えた時に、まず思いつくのが「象牙の塔」という大学像です。「象牙の塔」というのは、大学が学問の真理を追究する、ということを大事にしている大学像です。社会の役に立つか立たないかということとは関係なく、大学が独立して、真理を追究している。それだけで、社会から認められていて、権威を持ち得た。象牙の塔とは、そういった大学のイメージだったと思います。

しかしながら、その象牙の塔という大学のイメージは、今の大学改革の流れとか現状の中では、どちらかというとな否定的に受け取られている。この写真は東京大学の安田講堂の写真です



スライド3

けれども、これは天高くそびえる塔というか、いわゆる象牙の塔のイメージに近いものだと思います【スライド3】。ところが最近では、東京大学ではこういう写真が使われているんです【スライド4】。この写真では、安田講堂が左の隅に置かれ、奥に都市の風景が広がっている。大学の権威を主張するというよりは、どちらかという社会の中に大学があるということを強調した写真だと思います。

こういう写真が、どういうものに使われているかという、これは2年ほど前に作られた三つ折りのパンフレットですが、たとえば、このパンフレットの表紙に使われています【スライド5】。写真のなかのタイトルには「社会とともに歩む東京大学」といった言葉がうたわれています。そして、「社会とともに歩む東京大学」ということについての中身の説明を見ると、「社会に開かれた大学として」という文言があります【スライド6】。日本の中で最も象牙の塔の



スライド5



スライド4

「社会とともに歩む東京大学」とは

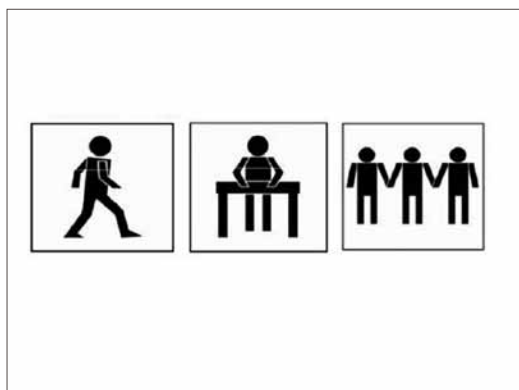
東京大学は、学問の自由と自律を基盤に、世界に向かって自らを開き、社会の過去・現在・未来に対して責任を担う教育・研究活動を行いながら、大学と社会との双方向的な連携を推進することを基本理念としています。

大学が社会と関わりあう回路は無数にありますが、よりいっそう「社会に開かれた大学」として、大学から社会への研究成果の還元という一方だけでなく、大学と社会が協働して課題を発見・共有し、新たな知とイノベーションを生み出す「知の共創」と呼ぶべき双方向の活動を推進するため、平成24年4月に以下の6つを柱に、社会連携に関する基本方針を定めました。

スライド6

イメージに近い東京大学ですら、このように「社会に開かれた大学」という言葉を使い、象牙の塔のイメージとは違うところを目指していく。それだけ「社会に開かれた大学」が重視される時代にある、ということがよく分かるかと思えます。

このように、「社会に開かれた大学」が目指されている中で、当然社会の側から大学に対して、さまざまなことが問われてくる。たとえばその一つとして、＜大学は果たして即戦力となる社会人を育成できているのか？＞ということが問われます。このイラストを見てパッと何か分かれる方、どれぐらいいらっしゃいますか【スライド7】。これは「社会人基礎力」と呼ばれる経産省が提案した三つの力を絵で表したものです。一番左側が「前に踏み出す力」。真ん中が「考え抜く力」。一番右が「チームワークで働く力」。これが社会人基礎力を表す。こういうものを経産省が提唱すれば、即それに応じ



スライド7



スライド8

るようなかたちで、文科省が学士力というものを規定して、社会からの要求に即したことを大学で教えるように、というような流れが生じるわけです。

最近では、「学士力」というワンクッションを置かずに、「社会人基礎力グランプリ」というイベントや「社会人基礎力授業30選」という募集が行われています。いかにこの社会人基礎力を学生に身に付けさせているのか。その効果の高い授業のベスト30をランイナップしている、ということまでなされるようになっているわけです。こうした事例は、即戦力になる社会人を大学は送り出しているのか、ということが問われていることを示しています。

もう少し違う観点からは、＜大学は社会貢献をしているのか？＞ということも問われています。たとえば、今日のシンポジウムを主催してくだっている京都文教大学の人間学研究所のホームページを見ますと、「学際的共同研究の成果を広く一般社会に向け発信する」という言葉があります【スライド8】。先ほど紹介ありましたように、昨年も春のシンポジウムを主催されており、他にも数多くのシンポジウムを行い、研究成果を社会に積極的に発信されている。こうした取り組みもまた、＜大学は社会貢献をしているのか？＞という社会からの問いに対して、応じるようなかたちで行われているといえます。

他にも社会貢献の形としては、大学が学生をボランティアに送り出すなどの取り組みがあります。さまざまな大学がボランティアセンター



スライド9

を設立し、学生が具体的なかたちで社会貢献をすることを推奨しているわけです【スライド9】。

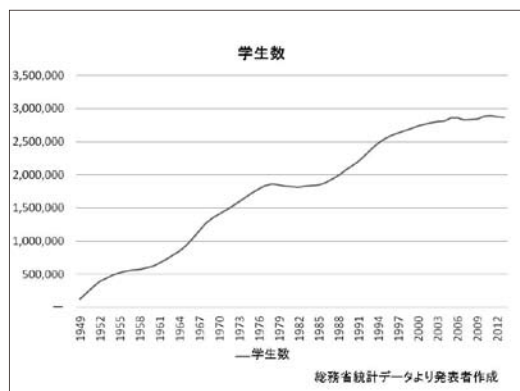
このように、「社会に開かれた大学」というのは、現代の大学改革の動向を非常に強く規定しています。そこで、改めて立ち止まって「社会に開かれた大学」というのは、一体どのようなところから語られ始めて、それは今どういう行く末になっているのかということを、少したどってみたいと思います。

「社会に開かれた大学」という物語

当然まず、これもよく見る表だとは思いますが、社会に開かれた大学ということが言われ始めるきっかけとしては、進学率の上昇ということがあります【スライド10】。これは進学率ではなく学生数の推移を見たものですが、1949年の時点では12万人しかいなかった学生が、今では280万人を超えている。それぐらい伸びている。最近では、若干少子化等の影響があつて

伸び悩んでいるというか、停滞しているようになっていますけれども。学生が増えれば当然、教員も増える【スライド11】。教員数のほうは、最近でも伸び率がほぼ変わってなくて、1950年前後は7,000人しかいなかった大学教員が、今では17万人もいる。つまり、どういうことかというと、大学が乱立するような状況が生まれるということです。現在では770校近い機関が「大学」という名前を持っている【スライド12】。このように大学数が増えて、大学が乱立する状況が生まれれば、当然、いかにその質を保証するかということが問われてくる。

これは大学評価学位授与機構というところが出している認証評価のマークです【スライド13】。大学は何年かに1度、文科省が規定する評価団体の評価を受けて、きちっと研究活動をしているかどうかということを、社会に説明する。説明責任を果たさなければいけないということになっています。



スライド10



スライド12



スライド11



スライド13

そうした法的な評価というものがある一方で、例えば、これはタイムズ紙が出している大学世界ランキングです【スライド14】。こうしたものも、最近では、普通のテレビのニュースなどでも取り上げられるほど注目されています。東京大学が20何位だとか、ベスト100の中に日本の大学は何校入ったとか、そういうことが注目されるわけです。

このように、進学率が上がって、大学が乱立して、その中で質を保証するという観点も加わる中で、大学を評価するという流れができます。そうすると、大学の中では、自分たちのしていることを可視化していく、説明責任を果たすということが重視されるようになってきます。

たとえば、教育では、シラバスをきちっと作っていこうという流れが生まれます。シラバスをきちっと作るということは、2つの意味がありまして、1つはカリキュラムを体系的にしていこうということ。もう1つは、各教員が15回の授業をいかに計画して組み立てていくのか、その知識をいかに構造化するのか。構造化して学生に提示するのか。そういうところが重視されていくようになります。

もっと言えば、1つの授業に対しても、分刻みのタイムスケジュールを計画するような授業デザインシートという、こういうものが配られ、学生にグループワークをさせたり、どういうタイミングで教員が説明をするのかとか、そういうことを設計するということが求められるようになってきます。

最終的にカリキュラムを体系化し、計画的に

授業を編んでいって、いかに効率よく就職できる学生を育てるのかというのが求められていく。就職に強い大学というのが、学生も保護者も社会も要求していることだというふうに考えられていく。

さらに、このように効率よく学生を育てていく、授業をデザインしていくという流れの中で、もともと品質管理の分野など使われていた「PDCA サイクル」といった言葉が大学の中にも持ち込まれるようになってきています【スライド15】。PDCA サイクル、馴染みのある方もいらっしゃるかと思いますけれども、例えば、授業についてきちっとシラバスを書き、「計画」を立てる。それで授業を「実行」してみる。それで、学生の授業評価アンケート、あるいはビューレビューで「評価」を受けて、その評価に基づいて自分の計画をもう1度「改善」とする。「これは評価をしっぱなしではダメで、きちっと次の計画の改善につなげることが大事です」というふうなことが、例えば、PDCA サイクルの効果を説明するときに言われるわけです。

私も東大での仕事は、このPDCAで回すように言われて、日々こうした流れを意識しながら仕事をするように求められています。この図では、ただぐるぐる回るだけのようにみえますが、これはただグルグル回るだけではなくて、改善して計画をさらに練り直してと、螺旋的にどんどんそれは良くなっていくだという話になります。ただ、このPDCA サイクル自体はこの螺旋の先にどこに行くのかとか、そもそもこの最初の計画の意義は何かなのかとか、そういうこ



スライド14



スライド15

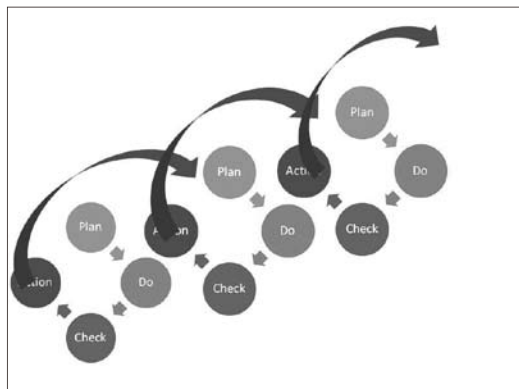
とを問う視点というのは、PDCA サイクルのなかにはないわけです【スライド16】。

そういうことを考えたときに、このPDCA サイクルを使って、例えば授業改善をするとか、そういうことを行うことで、見過ごされていることは一体何なんだろうということを立ち止まってみることができると思います。

もう1つ、進学率が上昇すると出てくるキーワードとして「研究から教育へ」という流れがあります。かつては、エリートのみが大学に通っていた時代には大学の教員というのは、自分の研究をしていることを学生に話すことで授業が成り立っていた。

しかし、今は例えば、初年次教育やキャリア教育といった、そういった研究とはかけ離れたところで教育を行うということが、非常に重視されてきています。

このスライドの左側は、昔からある講義室の風景です【スライド17】。右側は、これは東大の駒場キャンパスにある KALS と呼ばれてい



スライド16



スライド17

るところの写真ですが、一方向的に教員が前に立って、前を向いている学生に対して話をするのではなく、机もいすも可動式で自由に座れて、例えば学生同士でディスカッションしたり、そこに教員が加わることができるような教室です。そこでは、アクティブラーニングと呼ばれるような双方向的な授業実践が、どんどん取り入れられています。

一方的に教授するということから互いに学び合うという、そういう流れが生まれている、ということです。これは、先ほどの右側にあったところの教室での授業風景としてサイトに挙げられていたものです。この教室では、ICT 環境もすごく整っているのも、そういうものも使いながら相互に学び合うといった実践がこういった教室で繰り返し行われています。

このように、就職率を上げるという目標のもと、授業計画を綿密に組み立てつつ、学生の学びあいを重視するような傾向が進んでいっています。しかし、研究とは離れたところで、教育の改善に取り組んでいくなかで、大学だからこそできている教育とは何か、それが非常に見えづらくなってきている。専門学校や就職予備校と変わらなくなってしまっているのではないかなというふうに考えることができます。

大学の教育の面を考えたときに、大学独自の存在意義を喪失しているというような言い方ができるかと思うんです。次に、いかに大学が自分の存在意義を見失いつつあるのかということ、大学の広告を事例にみてみたいと思います。

これは南山大学の広告です【スライド18】。



スライド18

南山大学は、外国語学部など、国際的な学部があるためか、「南山で学ぶことで世界が分かる」ということを掲げています。このキャッチフレーズ自体の抽象度は高いのですが、なかに小さく「ここで世界を知るきっかけをつかんだ」と書いてあります。つまり大学で学問を学生に伝えるということを重視し、学問を通して世界の見方を変えること、そうしたことを大学の役割として提示しています。この広告は、大学の学問を学ぶことの意義を提示した例としてみることができると思います。

しかし、例えば、これ【スライド19】。とある大学の広告で、「お母さん、大学を面接しませんか」と書いてあります。まず完全に保護者に向いているところにも驚きます。この下に小さく書いてあるのです。「この大学のオープンキャンパスでは、保護者相談のコーナーがあります」と。そういうことを売りにして、じゃ、一体この大学が何を大事にしてるかということは、ここからはまったく分からない。

ただ、これもでもまだ内容があるほうで、さらに言うと、この広告は、これはもうちょっとどうやっていいのか、ただ学生が笑ってる【スライド20】。楽しそうではあるんですけど、お互いに顔をつまみ合って笑っているという、すごく奇妙といえば奇妙な写真です。××大学の、のち、スマイル」と書いてあるので、その大学に行ったら楽しい学生生活が待っているよ、ということを言いたいんだとは思うのですけれども。でも、じゃ、大学の教育とか、学問との関係とか、ここからは何も伝わってこない。さら

に、これはこの大学のホームページから得た情報ですが、大宮駅、渋谷駅、自由が丘駅と1カ月もの間、すごく大きなスケールで掲示されていたようです。つまり、一体、何万人の目にこれがとまっているのかをおもうと、これをそれだけ多くの人の目にさらすっていう感覚も、理解に苦しんでしまいます。

先ほど「専門学校化」と言いましたけれども、ここまで来ると専門学校のほうがよほど具体的なことを提示している【スライド21】。これはある専門学校の広告ですが、「理学療法士になりたいという思いに応える」ということで、「本気のあなたへ」とあり、具体的です。大学が専門学校化しているというふうに言われると、専門学校は非常に迷惑ではないかと。それほど大学は、自分の自己像というのを見失いつつあるのではないかというふうに考えられます。

しかしさらに驚くのは、大学の広告の内容のなさそれ自体よりも、こういう広告を見て行き



スライド20



スライド19



スライド21

たい、この大学に行きたいと思ってきた学生を集めて、その学生の学習意欲がないからといって、彼らの学習意欲やモチベーションを上げさせるために教員が授業デザインをして、PDCAサイクルを回して、という流れです。それで説明責任を果たしている、そう言ったところで、それは一体何なのか、と思うわけです。

つまり、自分の大学の存在意義について、自己喪失をしている状態で、説明責任を果たすということは、果たして責任を果たしていることになるのかということを問うことができるんじゃないかというふうに思います。

「社会に開かれた大学」の物語の外へ

今、お話してきましたように、「社会に開かれた大学」の物語は、進学率が上昇し大学が乱立するところから始まります。大学が乱立すると、その質を保証するための評価が重要になり、そこから大学の教育のあり方を可視化していくという流れが生まれる。けれど、その過程をたどった結果、いかに大学の自らの存在意義が見失われているか、ということが問題となってきている、といえると思います。

もちろん、これはあくまでも一つの見方ですが、そういうふうに見ると、説明責任というものが、非常に空虚にみえてくるわけです。そうであれば、説明責任とは違う形で、大学の責任の果たし方を考える必要がある、ということになります。そしてそのためには、社会に開かれた大学ということの物語の外に立ってみる、ということが大事になるのではないかというふうに考えられます。

私のあとにお話しされる藤田先生、井上先生も、時間の観点、あるいは、学生をどう捉えるのかという観点に立って、この今の一般的になっている「社会に開かれた大学」ということから一歩離れて、大学を考え始めるきっかけをくださると思います。私のほうからは、＜社会は一体どこにあるのか？＞という問いを提起して、お話を終わりたいと思います。

お配りしたレジュメに書いてありますけれども、1つは、「評価のための空虚な社会」というのが考えられると思います。大学が乱立してき

た結果、認証評価が求められるようになっていると先ほど言いましたが、認証評価の目的には次のように書かれているわけです。認証評価をすることによって、大学の評価を社会に問うこと。その社会を通して大学はまた自己改善をするということが認証評価の目的である、と。ところが、ほとんどの人は、認証評価の実際の具体的な文章を目にすることはしないと思うんです。先ほどの広告のほうがよっぽど何万人もの目に触れているわけで、大学の認証評価の目的において、評価を社会に問うというときの社会というのは、ほぼ実態のない、中身のない空虚な社会であると考えられると思います。そして、現在、大学改革の中で、もう1つ社会というものに内実があるとすれば、社会人あるいは、産業界というときに使われる「経済活動の場としての社会」ということだと思います。学生が就職して社会に出る、というときの社会です。それはほとんど経済活動の場として、学生が将来どこかの企業で働くということを前提に考えられているわけです。

しかし、もう一つ、「学生にとっての社会」ということを考えた場合、単に就職して企業で働くだけではなく、家族との時間があったり、あるいは友人とのかかわり、趣味の時間があったり、「地元」といった地域コミュニティがあったり、そういうさまざまなかかわりが社会という言葉の中には含まれているということが想像できます。そうであれば、「学生にとっての社会」においては、さまざまな関わりの中で生きていくことが、一体どういうことなのかというのが、切実な問いとしてあるのではないかと考えられるのです。

そう考えた場合、こうした問いに大学の学問は、どう答えていけるのか、応じていけるのか、というところから、大学と社会のかかわり方、大学の責任の果たし方を考えていく。アカウンタビリティという言葉とは別のかたちで考え始めることができるのではないかと。このような問いを、私ほうからの問題提起とさせていただきたいと思います。

最後に、これは最近話題になっている『ハンナ・アーレント』という映画ですが、こ

の作品をご覧になったことのある方、どれくらいいらっしゃるでしょうか。ありがとうございます【スライド23】。この映画は、ユダヤ人の哲学者であるアーレントが、ユダヤ人のホロコーストの問題を哲学的に考え抜いていったことと、社会とのかかわりを描いている作品です。大学自体は中心的なテーマではないのですが、随所で大学が登場するんです。学生とのやりとりが出てきたり、講義シーンがあったりします。今日のコーディネーターの黒宮先生が、アーレントを研究されているということもありまして、最後にスライドにのせてみました。大学の責任のあり方ということを問うのに、この映画は考えるポイントをいろいろくれる映画だと思うので、後ほどディスカッションの中で触れることができればいいなと思います。あるいは、まだご覧になっていない方、別に回し者ではないですけれども、これを見て、また今日のテーマを考えていくきっかけにもなると思い、この映画をご紹介します。どうもありがとうございます。(拍手)



スライド23

黒宮：どうもありがとうございました。最初から「刺激的」すぎたかもしれませんが、2番手は藤田さんです。お願いいたします。

「大学の時間」

藤田尚志（九州産業大学 国際文化学部 臨床心理学科 講師）

藤田尚志：よろしくお願いします。九州産業大学の藤田と申します。私の専門はアンリ・ベルクソンという20世紀初頭の哲学者を中心とするフランス近現代思想です。ではなぜこのシンポジウムでしゃべるのかということなんですけれども、日ごろ思っているのは、大学論をもっと開かれたものにしなければいけない、ということなんです。大学論というと、やはり大学論の専門家が語るものという風に思われがちですが、しかし考えてみると、知というものはウィルスのように空気感染していくものですから、大学論の専門家ではない大学教員はもちろんのこと、自分は大学なんか何の関係もないと思っていらっしゃる一般の方々でさえも、何らかの形で実は皆さん大学にかかわっている。だとすれば、それぞれの方が自分なりの「大学」像、自分なりの「大学論」をもっていたほうがいい。

その際、大学論や高等教育論について、あるいは現代の大学が置かれた政治的・経済的・社会的・文化的状況について、できるかぎりの知識をつけたうえで思考し、発言することが理想的なのはもちろんですが、最も大切なのは、実はそういうことではないと思うのです。むしろ、「自分はこの分野について無知だから何も言う資格はない」という見かけの知的誠実さを隠れ蓑にして沈黙してしまわないこと、そういった“自主規制”から解放されることがまずは大切ですし、さらに決定的に重要なのは次の点です。つまり大学教員であれそうでなかれ、皆さんそれぞれご専門のほうで深い学識をお持ちなわけですから、それを何らかの形で利用して、ご自分なりの独創的な仕方大学について論じることができるし、また積極的に論じていくべきなのではないかということです。冒頭で「大学論を開かれたものにしなければいけない」と申し上げたのは、そういう意味です。

そういうわけで、蛮勇を奮って、自分自身の専門である哲学を用いて、私が大学について考えている二三の事柄をお話ししてみようと思っ

てまいりました。そうやって「非専門家による大学論」のサンプルを提供することで、みなさんがそれぞれなりの「大学論」を作り出されるきっかけになれば、と思った次第です。

時計の時間と心の時間

さて、私が中心的に研究しているのは、アンリ・ベルクソンという20世紀前半に活躍したフランスの哲学者なんですけれども、彼は「持続」という概念で有名な、「時間の哲学者」というふうに言われています。では、それはいったいどういった考えなのでしょう。

普通私たちが「時間」と言うとき、時計の時間を思い浮かべますよね。それは計測可能なものである。ということは、一分とか一秒とか単位がある。ということは、等質的で可逆的である。千年前の一秒も今の一秒も同じ単位でないと意味がないし、比較できない。どこを測っても、どの一秒も同じ意味を持っている。客観的な時間である、と。

では、時計の時間だけが時間かというところではない。心の時間というものがある、とベルクソンは言います。これは測ることができない。なぜかという、同一基準の単位つまり尺度がないからです。例えば、大好きな人と待ち合わせして待っているときのもどかしい五分というのはとても長い。しかし、会っているときの高揚した五分はあっという間に過ぎていく。

逆に、学校でしばしば見かける現象ですけれども、楽しい休み時間はあっという間に過ぎていくのに、退屈な授業はものすごく長い。何か果てしなく続く拷問のように感じてしまう。今この話がそうでないことを祈っておりますが（笑）。心の時間には一瞬たりとも同じ時間というものではなく、常に微妙なニュアンスの違いがある。つまり異質的で、不可逆的で、主観的な時間だということです。

ところで、普通私たちは客観的に計測的できるものは実在すると思っている。そして、主観的で計測不可能なものは、思い込み・妄想・フィクションであるというふう考える。けれども、例えば、長さの単位というのは、昔は寸とか尺だったわけです。それがメートル、センチ

に変わった。このことから分かるように、長さというものがどれほど実験で検証可能であって、その意味で役に立ち、実用的な功利性というものを持っているとしても、それでも、尺度というのは人間が取り決めた約束事にすぎない。時計の時間もまた、人工的・人為的なもの、専門的な言葉で言えば規約的（conventional）なものにすぎない。

逆に、心の時間というのは一見すると非常にあやふやに見えます。測ることができず、実験で確認できず、その意味で一見無意味なものと思われるからです。そしてこういう時間は役には立たない。時計の時間というのは役に立ちます。例えば、私たちが待ち合わせるのは、時計の時間によってです。時計の時間で明日五時に待ち合わせようということはできますけれども、明日ちょっと心の時間で待ち合わせようということはできない（会場笑い）。ひとりひとり異なるからです。

しかし、この心の時間というものは、誰が取り決めたわけでもないのに、人間が存在し始めた太古の昔から、確実に存在している、自然なものである。それなしでは人間が人間であり得ないような、そういう時間です。これこそが実在的（real）な時間であると、先ほどの「規約的」な時間ではなく、「実在的」な時間であるとベルクソンは言います。

先にも述べたように、心の時間は役には立ちません。客観的に検証可能、実験可能なものもつ有用性・功利性（utility）をもたない。しかし、にもかかわらず、心の時間は、明らかに人間の精神生活を根底から支えている。それを無視して生きていくと、どこかでおかしなことになってしまうような時間です。例えば、大好きなひとと会っているとき、一瞬たりとも同じ瞬間はない。一瞬一瞬すべて意味が違う。ところが、時計の時間として測った途端に、時間はその表情を失ってしまう。「あ、今、五分経った。あ、十分経った」というふうになると、デートの時間は確実に壊れる（会場笑い）。時間の意味が無意味になってしまうわけです。心の時間は、不可逆的で実験できず、「無益」かもしれませんが、決して「無意味」ではなく、ある

種の効力 (efficacy) をもっているのです。その力はまさに、時計の時間によって時間を測っているときに私たちが取り逃してしまっているもの、つまり過ぎ去りつつある時間の“質”からやってくるのです。

尺には尺を——新たな尺度の模索

さて、「時計の時間」と「心の時間」について、計測可能／不可能、等質的／異質的、可逆的／不可逆的、規約的／実在的、功利性／効力といった一連の対立項を見てきたわけですが、これをもう少しだけ深めてみましょう。時計を見ているとき、私たちが何を見ているかという、実は時間を見ているのではなく、針と針が作る角度の動きを見ている。つまり、私たちは時間を見ていると思っているが、実は空間を見ているのです。その意味でベルクソンは、時計の時間を「空間化された時間」と呼びます。逆に、一瞬一瞬の時の流れとそのニュアンスや質の違いが決定的に重要であるような、こういう時間をベルクソンは「持続」と呼んでおります。

では、ベルクソンは「心の時間＝持続」を持ち上げて、「時計の時間＝空間化された時間」を否定しているのか。計測可能な量的なものを否定し、計測不可能な質的なものだけが大事だと言っているのかというと、そうではありません。ベルクソンは決して「計測」そのものを否定しているわけではない。ここが大事なところです。

「時計の時間」以外にも、それと同じくらい、しかしながらそれとは違う尺度で大切な時間が実在している。量的な計測は計測対象を著しく限定するものであり、場合によっては、その限定によって計測されるべき当の対象の本質が取り逃されてしまうこともあるのではないかと自問すること、これは私たちにとってきわめて大切なことです。

なぜ大切かと言えば、そのように自問することによって、では、測りえない時間とはいったいどのようなものであるのか、と考えることになるからです。現時点で計測されているものの限界を指摘することは、測りえないものを測ろうとする新たな努力につながる。ベルクソンが「持続」という概念を提出することで考えよう

としていたのは、まさにこういうことです。そういう来たるべき計測のための思索的な努力の結晶が持続という概念であるということです。

ベルクソンが計測を否定していないことは、次のような言葉からも分かります。これは『思考と動くもの』という論文集の冒頭部分にいわばマニフェストのように置かれた有名な一節です。「哲学に最も欠けているのは精確さ (précision) である。これまでの哲学体系はいずれも現実の寸法＝尺度 (measure) に合わせて仕立てられたものではない」。ベルクソンはここで洋服の仕立ての比喩を用いています。今までの尺度はレディメイドな、個々の事物の特性を考慮しないお仕着せの尺度であった。そういう千篇一律の、従来の間尺で測りきれない、複雑で繊細な現実の襞をそれに固有の屈曲に則して測るためには、オーダーメイド（これは和製英語ですが）、テーラーメイドの新たな尺度を発明していかなければいけないと。シェイクスピアに『尺には尺』 (*Measure for Measure*) という作品がありますけれども、まさに尺には尺、より現実に取り添った新たな尺を探していかなければいけないということです。

ベルクソンと言いますと、機械主義を批判しているとか、精神的なスピリチュアルなものにいつてしまったとか、そういうふうに思われがちなんですけれども、実はそうではなくて、当時の科学に対して、より精緻な計測のための新たな努力を喚起するということを常に続けていた人であるわけです。計測の否定ということではなく、新たな尺度の模索ということです。

そうすると、しかし、こういう風に考える方もいらっしゃるのではないのでしょうか。「そうは言っても、持続という概念によって何が測ることができるようになったというのか。結局量的に計測できるようにならなかったではないか」。ですが、これは計測や数量化、ひいては科学というものを非常に狭く取った場合の見方で、こういうひとは、そもそも「批判」と「否定」を取り違えているのです（「反原発」を唱えながら即座に実行可能な現実的代替案を示せない者は、無批判に現状を受け入れるべきである云々）。しかし「批判」と「否定」は違うもの

です。そういう概念的な批判を通じて、文化も科学も社会も前進していくものなのです。

キリスト教的道徳革命と国民総幸福

このことを幾つか例を挙げて説明したいと思います。レジュメのほうには一応四つ例を挙げたんですが、時間の関係上、二つだけ見ます。

まず一つ目はキリスト教が行なった道徳革命です。それまではハムラビ法典なんかの「目には目を歯には歯を」に代表される、いわゆる同讐法と言われる、同じだけの量刑を与える法律が道徳的と見なされていました。「やられたらやり返せ」が道徳的規準・尺度だったわけですが、それがイエス・キリストによって、「右の頬を打たれたら左の頬を差し出せ」という全然違う考え方・価値観、ほとんど間逆といっている規準・尺度価値観が登場してきたわけです。

ベルクソンによれば、このキリスト教的な考えが、後の「人権」や「民主主義」といった概念につながっていきます。このあたりの宗教と政治や民主主義の関係は非常に興味深い主題であり、私もマルセル・ゴーシェ『民主主義と宗教』（トランスビュー、二〇一〇年）を翻訳するなど多少研究を行なっておりますが、それについてはまた別の機会に譲るとしまして、このキリスト教の道徳革命についてベルクソンはこんなふうに言っています。「われわれは、福音書の戒めのうちに見られる実行困難なものを、微分学初期の述べ方に見られる非論理的なものになぞらえることができるのではないかと」。

つまり、微分や積分という考えが登場する以前は、単に非論理的・非合理的というふうに分けられていた諸問題が、科学の新たな展開によって、思考可能なもの・論理的なものの枠内に組み入れられるということがあった。それと同じように、道徳においても、「目には目を」という容易に計測可能・数量化可能な道徳観が支配的であった時代には、単にありえない考えであったものが、「右の頬を打たれたら」というイエス・キリストの言葉によって一つの極限的な指標を示されることになるというわけです。

ちなみに、フランス語で「計測する」を意味する動詞の過去分詞形 *mesuré* はまた「節度の

ある、慎重な」という意味の形容詞にもなります。そしてきわめて興味深いことに、ほぼその真逆の「計測を超え出た」を意味する *démesuré* は「けた外れの、途方もない」という意味をもち、否定的な文脈のみならず、肯定的な文脈でも用いられます。今の文脈で言えば、「右の頬を打たれたら」は、登場した当時は計測不能の、途方もない、*démesuré* な道徳観でしたが、やがてありうべき、計測可能な道徳観の極限として理解されるようになったのです。

さて、〈計測された＝節度ある〉道徳と〈計測を超え出た＝途方もない〉道徳の関係について、ベルクソンはこんなふうに言っています。「現在行なわれている道徳が廃されるのではない。そうではなく、今や進歩途上のいわば一つの瞬間として示されるのである。古い方法が捨てられるのではない。そうではなく、ちょうど動力学が静力学を自らのうちへ吸収して、その特殊なケースとしてしまう場合とも同様、より一般的な方法のうちへ合体されることになるのだ」。ここで重要なのは、「目には目を」という旧来の“尺度”が廃棄されたわけではないということです。そうではなく、道徳的か否かを測る“計測規準”が変わったのです。つまり「目には目を」は無意味になったのではなく、意味を変えて、限定的・特殊な一つのケースとなったのです。既存の道徳の否定ではなく、新たな道徳への包摂です。

こういった革新的な変化というのは、本当にわれわれの身近で頻繁に起こっていることです。今度は一気に二千年を飛び越えて、現代の例を見てみましょう。私たちの幸せというのは、ずいぶん長い間、「国民総生産」つまり GNP (Gross National Product) という経済的な尺度で測られてきたわけですが、ここ十年ほどでしょうか、GNH (Gross National Happiness) という考え方が登場してきました。「国民総幸福」と訳されています。最近ニュースなどでブータンの幸福度が世界で一番であるというようなことが話題になっておりますが、そのときに指標として挙げられているのがこの GNH です。ここで非常に大事なことは、ブータンの若き国王がハンサムであるかどうかということではなく

(会場笑い)、今まで経済的な成長率という一点だけで測られてきた国民の幸せというものが、心の豊かさや健康、文化的多様性や生物多様性・環境保全といったさまざまな尺度によって測られるべきだと考えられるようになってきたということ、つまり尺度が複数化され、より精緻化されてきたということです。このGNHという考え方の中で、所得という基準は否定されたわけではなく、生活水準という形で一つの指標として包摂されています。以上二つの例を挙げましたが、道徳の規準や人々の幸せを測る尺度ですらも変化しているわけです。

ベルクソンに戻れば、彼はこういった尺度の変化を、時間というものについて考えた哲学者なのです。砂糖水をかきまぜてそれが均一に溶けきるまでの苛立たしく待ち遠しい〈持続＝心の時間〉は、〈空間化された時間＝時計の時間〉として計測することはできない。それは言い換えれば、測りえないものを測ろうとすることによって、測ること自体を測る、計測の基準・尺度そのものを問い直すということです。時間の計測における“尺度”の変更、計測そのもののあり方に関する途方もなくラディカルな変更を要求しているのです。

さて、「そんなことがいったい大学論と何の関係があるのか」と、会場のみなさんも今まさに苛立たしく待ち遠しい時間を（笑）お過ごしだと思いますが、ご安心ください。これまでの話はすべて本題と関係しております。

数に溺れる大学——満足度と幸福度

大学は、特に人文系の大学教員は、数字と無縁の生活を送っていると思われがちですが、ここ最近の大学は、人文系の教員でさえも、実は“数に溺れて”いるわけなんです（パワーポイントでお見せしているように、これはピーター・グリナウェイの映画のタイトルです）。例えば、大学の入り口で言いますと、志願者数、入学者数、定員充足率。大学の中では、学生で言えば、講義とかゼミの出席回数とかGPA。教員で言えば、講義・ゼミの履修者数、授業評価アンケートの点数、教授会の欠席回数。出口のほうで言えば、中退率、就職率、教員採用試験

合格者数。こういった数字に私たちは溺れてしまっている。

それはどうしようもないことだとおっしゃるかもしれません。現代社会にあっては当然のことだと。しかし、実は私たちは、数字の前で思考停止しているだけなのかもしれません。とにかく数字が出てくれば何となく安心するというか。だから逆にこう問わねばならないのではないかと思うのです。数に溺れているというときの、その“数”というのは一体何なのか。大学は、その数によって一体何を測ろうとしているのか、と。数字の意味を問う、計測の基準そのものを問い直すことが重要なのではないかと。

現在大学の中で数字にこだわっているように見える人々について危惧すべき点は、彼らが数字にこだわりすぎているということではなくて、実は数字に十分にこだわらなさすぎるということではないでしょうか。数字にこだわっているように見えて、数字の「中身」にはこだわっていないのではないかとということです。

こういう話をするときによく、二項対立的に〈数字至上主義者〉と〈数字不要論者＝「大学とは無用の用」論者〉という構図で語られることがありますが、そういう構図というのは、どこにも出口がなく解決に至らないという実際的な理由だけでなく、どちらの側も実は厳密には存在せず、この論争自体が実体のない不毛なものだという原理的な理由から、間違っていると思います。ですから、数字と縁を切るか否かではなくて、その数字の意味を考えるということがやはり大事になってきます。

そういったパースペクティブをもって、大学の数字を見渡してみると、いろいろな問題が見えてきます。例えば、「入試は大切、入学者の質確保」は大事であると言いながら、入学試験はマークシートだけで、記述は一切やらない、と。これでは測れる質というのはかなり限定されてしまうわけですが、そこにかかる労力、あるいは対費用効果といったことを考えると、どうしても記述式に踏み切ることはできないというふう考える。

これは一度考えてみる時期に恐らく来ていると思います。センター試験を廃止する、知識偏

重で一点刻みの一発勝負の現行試験を見直すという動きは、そういった時代の流れの表れと見ることもできるでしょう。何回でも挑戦できる、その人の持続的な能力を測るというほうに移行しつつあるわけです。もちろん、最終的な結論が出たわけではないので、予断は許しません。

それから、出口のほうで言いますと、私たちは就職率という数字に非常にこだわっています。社会も親御さんも学生さんもこだわっている以上、大学教員もこだわらざるをえないという状況になっています。そして、とにかくどこかの会社に押し込むために、大企業が足きり用の一次筆記試験として課している（リクルートが開発した）SPI 試験を解かせることに少なからぬ時間を費やしております。

他方で、離職率というのは、大学の出口を語るときにほとんど問題とされませんが、大卒の大体三割ぐらいが三年以内に離職するわけです。これは「七五三現象」と呼ばれるもので、中卒者の七割、高卒者の五割、大卒者の三割が早期離職するという現象です。大学は、必要な分野に限られたリソースを傾注しなければならないはずであるのに、なぜこの離職率という数字には注目しないのでしょうか？古典をしっかり読む、難しくても分からなくてもかじりついて一行一行読み進めていく、そんなことは無駄だ、就活の役に立たない、と。それで、四年間かけて講義やゼミの中で一生懸命 SPI 試験対策をして、つるかめ算や旅人算がどうのこうのと必死で勉強をして、三年で辞めてしまう。そうしたらその後、それは何の役に立つのでしょうか。

ですから、大学が社会の役に立つというときに、一体何の役に立てるつもりなのかということをも真剣に考えなければいけない。これは大学側の人々だけが考えるべき問題ではありません。社会のほうでもやはり考えていかねばならない。私たちは、大学生にどういった力をつけて社会に出てもらいたいのか。果たして大学で付けるべき力、社会人基礎力とは本当に、SPI 試験を解けることであるのかということです。先ほど大学入試のマークシート試験について指摘したことと、今 SPI 試験についてお話ししたことは、実は同じ「計測」の問題であるということが理

解していただけたと思います。

ここまで大学の入り口と出口の話をしてきたので、今度は中の話です。中退率にこだわる、中途退学者を出さないためには、学生たちの満足度をアップさせねばならない、という議論はどこ大学でもあると思います。その場合、学生たちの成長、社会人基礎力育成のために必要なものを、大学側も学生たち自身も理解しているということが前提とされています。ですが、学びで何を得られたのかというときに、どうしても例えば TOEIC や TOEFL の点数が上がったですとか、漢字検定の何級に合格したとか、そういった容易に数値化できる到達度から得られる満足度ばかりが測られてしまっているのか。先ほど国民総幸福の話をしましたけれども、学生が学ぶ喜び、学びの幸福度みたいなものを測る指標がほとんどない気がするんです。それは学生の授業評価アンケートで満足度アップとやっていうこととは、またちょっと違うことだと思うんです。「満足度」と「幸福度」は少し違うんじゃないかという気がするわけです。

憧れと義務——教育の二つの源泉

もうそろそろ時間ですので、少しペースを上げていきますけれども、教育の中で今大事なのは、学生に義務として何を押し付けるかということではなくて、先生に憧れるということから得られる幸福度をいかに測るかだと思います。この先生は何を言っているのかよく分からないけれども、でもこの先生はとにかくすごい。何か惹かれる。そういうのが大事だと思うんですよ。振り返ってみると、私たち自身もやはりそういうところでモチベーションを得てきた部分っていうのはあるのではないのでしょうか。もう一度教育の根源に立ち返って考える必要があるんじゃないかと思います。教育の二つの源泉としての「憧れ」と「義務」（詳細は省きますが、これもベルクソンの対概念です）について考えてみないといけないということです。

そのときに、これは小中高から続く神話ですが、「子ども中心主義」というのがあります。子どものやりたいようにやらせるのがいいんだ、子どもの自発性を喚起するんだ、と。

そのとおりなんですけれども、ただ、注意しないといけないのは、教育の中にはパラドックスがあるということです。よく「主体的に学ばせる」「自律的・自発的になるように導く・促す」などと言いますが、導かれたり促されたりしている時点で主体的・自律的・自発的ではないわけで、そこには逆説があるわけです。

教育というものがもつこの根源的なパラドックスを考慮に入れますと、自発性を信じて学生が「有益だ」「得だ」と判断することだけを元に教育が行われてよいものか、よく考える必要があります。そこで参考になるかもしれないのが、ジョルジュ・ソレルの『暴力論』です。

これは政治哲学でも重要な古典ですが、そこでソレルは強制力 (force) と暴力 (violence) というのを区別しています。「強制力」というのは、無理やり何かさせる。さっきの言い方で言えば「義務」です。それに対して「暴力」というのは、これは普通はあまり肯定的でない言葉として用いられますが、ソレルの場合はちょっと変わってまして、暴力っていうのは、強制力じゃないんだと。確かに何か切断するような力ではあるんだけど、その結果何か創発的な創造的な事態が生じてくるような力、運動に巻き込んでいく力ということです。暴力という言葉自体はあんまり良くない言葉ですけども、彼がここで提出している考え方自体は非常に参考になるところがあると思うんです。

子ども中心主義がさらに強まると消費者主義になります。学生は消費者、ユーザーなので、ユーザーフレンドリーな教育を行わねばならないというわけです。こういう場合、学生の“ニーズ”を、えてして学生目線だけから考えてしまう。学生に何が与えられるべきなのかを考えない傾向があるように思うんです。

けれども、教育とは〈出会い損ないによって出会う〉ものです。こういうものを与えますよって約束されて、文字通りそれを与えられて、「ああ良かった、満足」というのと、教育とは少し違うんじゃないか。先ほど満足度と幸福度は違うと言いましたが、私たちが例えば、好きな人と出会って望むことは満足じゃなくて幸福じゃないかと。全然思ってもみなかったよ

うなサプライズを与えられたときに、ドキドキしたり、うれしかったりする。これは教育でも同じだと思うんです。教育とは〈約束されたものとは違うものを手に入れる約束〉なのではないかという気がするんです。ベルクソンの言う「憧れ」、ソレルの言う「暴力」が指している事態がこれです。

「社会人」養成か、「会社人」養成か

ところが、今の大学というのは、悪くいくと思考停止ビジネスと言いますか、学生になるべく考えさせないような方向に進んでいる気がするんです。これは一見すると「子ども中心主義」「消費者主義」と真逆のように見えますが、実は同じ事態の表と裏です。学生に与えるものはすべて決めて、カリキュラムなんかかなりガチガチに組んで、さきほど藤本さんが見せてくださった授業計画みたいに、何分には何をしてというところまでね。就活指導なんかでもそうです。一年生のころから就活セミナーに行って、もう入り口から出口までカッチリとプランニングされていてという。一体そこから何が生まれてくるんだろうかっていう、その問いかけ自体があまりないような気がするんですよ。

言い換えると、「社会人」養成って言いながら、「会社人」を養成している気がするんです。日本の今の社会もそれを求めているし、親御さんも学生さんも求めている気がする。でも、社会は会社じゃない。会社が社会のすべてではないし、人生のすべてでもない（この話に興味のある方はぜひ『ザ・コーポレーション』という映画を見てください）。

大学というのはむしろ、就職した会社が倒産しようが、そこから早期離職しようが、その後、残りの人生を心豊かに生き抜いていけるように準備をするための場所であるべきなのではないでしょうか。ですから、就職活動はもちろん大事なんですけれども、その後まで含めたようなことが考えていけばいいのかなと思います。学力を付けるっていうときに、生き抜いていく学力こそが考えられるべきだと。豊かに生きるというとき、その豊かさの質、そこに流れている時間をいかなる尺度で測るのか。大学には、

その質の計測、その質を測る新たな概念的努力をずっと続けていく、そういう場所としてこそ本当の社会貢献ができるのではないのでしょうか。

大学の中で流れている時間

さて、話をまとめる時間になりました。フランス哲学を専門とする私は、時間の哲学者ベルクソンの「持続」や「空間化された時間」といった概念をご紹介します、そこでポイントになっているのは「測りえないものをいかに測るか」ということであると申しました。そして、二千年前のキリスト教による道徳革命や近年の国民総幸福といった例を通して、道徳観や幸福観といった一見変化のなさそうな領域においても計測や尺度のラディカルな変更がありうることを見たうえで、“数に溺れて”いる大学が現状をいかに考えるべきか、入り口・出口・中についてそれぞれ具体的な問題点を指摘し、教育の根源的なパラドックスから考え直す必要について述べてきました。そこで最後に、タイトルにもした「大学の時間」についてお話して終わりにしたいと思います。

大学の中で流れている時間に対していつも批判があるわけです。これはビル・レディングスが『廃墟のなかの大学』で言っているんですけども、「短絡的な考えがもたらす有害な例の一つとして、多くの教授たちは週六時間しか働かないという現在の認識がある。野球選手が打者としてバッターボックスに立つ時間によって報酬が決まるとは誰も考えないし、何を価値あるものとするかの判断は、多くの複雑な要因を考慮に入れて慎重に行わねばならないと誰でも知っている」。プロ野球選手が一日三時間半しかプレイしないからといって、あるいはキャッチャーが試合中ずっと座っているからといって、楽な商売だとは誰も思わないわけですよね。その裏の努力をみんな知っている。ところが、大学教員のやる講義やゼミでの指導については同じように考えないわけです。

これは、大学の外ばかりでなく、大学の中で働いている事務職員さん、ひいては大学を運営する理事たちでさえも誤解していることが多い。そこから「教員というのは楽をしているので、

もっと働かせなきゃいかん。だから、タイムカードを導入して、朝九時から夕方五時まで拘束して…」という発想になる。でもちょっと違うんじゃないか。そういう強制力によって得られる何かは、大学教員が与えられる何かじゃないと思うんです。大学の中で動いている、生きた時間、“持続”というものの測り方が間違っている。タイムカードで測れるような“時計の時間”とはちょっと違うものだと思うんです。

学者や教員をコメディアンや芸人に例えると（どちらの側から）怒られるかもしれません。芸人さんたちを九時五時まで拘束したら面白くなるのでしょうか。ちょっと極端な比較かもしれませんが（笑）。以上はほんの一例にすぎませんが、大学の中で流れている時間とは一体どういう時間なのか、そしてそれはどうやったら適切に測れるのかということを考えてみる必要があると思います。社会で流れている時間とはまた異質なこの“大学の時間”をいかに計測できるのか。このことは、震災後を心豊かに生き抜いていこうとする私たち日本人にとってどうでもいいことではないように思われるのです。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

黒宮：藤田先生、どうもありがとうございます。あつという間に最後の井上さんの番になりました。井上先生、よろしくお願いします。

「参加の時代から参加型の時代へ」

井上義和（帝京大学 総合教育センター 准教授）

井上義和：皆さんこんにちは、帝京大学の井上です。藤本さんと、藤田さんのご報告を、「どうして20分でこんなに密度の濃い話ができるのかな」と感心しながらお聞きしておりました。大学にお勤めの方にとっては、自分たちの大学が、どれだけ大変な目に遭っているのかということをお2人それぞれの立場からうまく説明してくれたと思われたんじゃないでしょうか。私自身、もう「あるある」の連続で、自分が普段何となく抱いていた違和感に対して、うまく当てはまる言葉や、画像をパッパッと出してく

ださって、非常に良かった。とても勉強になりました。

私の報告のタイトルは「参加の時代から参加型の時代」というもので、これは大学の中の学生の位置づけの観点から、学生が変化しているという話をしようと思って付けたものです。当初予定していた内容というのは、レジュメの下の参考文献で挙げましたが、昨年「大学構成員としての学生—「学生参加」の歴史社会的考察」（『組織としての大学』岩波書店、2013年所収）という論文を書きまして、ちょっと宣伝をしてしまいますけども——そこで展開した議論の一部でした。

しかし、お2人のご報告と、それから最初の黒宮さんのお話をお聞きしまして、予定を少し変更することにしました。冒頭申し上げたように、皆さんが近年の大学に対して抱えている違和感に対して、お2人はすごくうまく答えてくださったんですけども、それに対して「待った」をかける視点を私は提示したいと思います。これはお2人のご報告に反論するというわけじゃないんですけども、今日祝日ですよ（会場笑い）。せっかく祝日にもかかわらずお出でいただいた皆さんに、違和感に言葉を与えてもらって、「何かスッキリした」というだけで終わるのではなくて、「自分ならどう考えるかな」という別の違和感をかきたてる問いを、今日は持ち帰っていただきたいと思います。

教師は焦っていない

司会の黒宮さんからタイトルについてお話がありました。「日本の大学、このごろ焦っていませんか？」。たしかに、大学は焦っています。でも、教師は焦っていないということを、私まずお答えしたいと思います。大学は焦っている。しかし、教師は焦っていない。これはさきほどの藤田さんの「大学の時間」のお話とつながってきます。もう一度、繰り返します。大学は焦っている。しかし、教師は焦ってない、なぜか。

ここに京都文教大学の学長先生、それから副学長先生がいらっしゃっています。学長先生は焦っています。しかし、このシンポジウムを企画された黒宮さんは焦っていません。どうして

でしょうか。じつは、まったく違う時間を生きているんです、2人は。同じ組織に所属しながら（笑）。では、役職にともなう責任の大きさの違いでしょうか。いや、そんな相対的な程度の違いではなくて、もっと絶対的な違いです。そういう話をします。

それから、学生も焦っています。なぜか。もう高校時代から進路を考えると、「あなたは将来何になりたいのか」、それが例えば「理学療法士」だったら、「じゃあ、理学療法士になるためには、どこの学校に行けばいいのか」「この大学のこの学科の受験にはこの科目が必要だから、今何点ぐらい取らなきゃいけない」とって、逆算して今やるべきことを決められるんです、高校時代から。

入学直後から保護者も巻き込んで、「今の大学の就職状況は」といって煽られます。それでまた焦って、例えばコミュニケーション力を高めるためには、やっぱりサークル活動もそれなりにやらなければと。またボランティア活動だったらこの部署に相談に行きなさいとか、逆算して今を生きるように強いられる。

でも、教師は焦っていません。ここに大学の先生がたくさんいらっしゃいますけれども、たぶん心の底では焦っていないと思うんです。なぜか。大学の学長とか、学生とか、あるいは経済社会の活動とは違う時間を、教師は生きているからです。もしも大学に希望があるとすれば、さきほどの藤田さんの「大学の時間」のお話ともつながりますが、おそらくそこにあるのではないか。これが、私が、今日いいたいことの1つです。

教師の時間、学生の時間、それから大学の時間（学長の時間です）と社会の時間、これは全部違うんです。このシンポジウムは「いわゆるFDではない」ということをお聞きしていましたが、FDの場で講演するときに、教師でありながら学長の代弁をする人がいるんです。大学の焦り（学長の焦り）に共鳴して、その焦りをどうすれば解消できるのかって、一生懸命学長のために代弁する講演者がいるんですけども、FDに参加している教師はじつは焦っていない。そのことをまず確認しておきたいと思います。

学生参加論の二度の流行

ここでやっと、お手元のレジュメに移りたいと思います。

はじめに、というところで、「『大学の外部からやってくる危機』に対峙する『教師と学生の学問共同体』？」という問いを掲げました。

今日はだいたい50代以上、60代とか、そのぐらいの年配の方が多く来られています。皆さんの大学時代は、60年代から70年代なので、「あるべき大学像」を考える原点もこの時代だったりします。当時の学生たちは、今の学生たちとは違い、政治的な意識が高く、大学では主体的に学び、そして参加を求めて闘った——実際にどれほどの学生がそうだったのかは措くとしても、それが当時の「あるべき学生像」だったというイメージをお持ちの方は多いと思います。とにかく「学生参加」という言葉が、キャンパスで飛び交い、メディアに取り上げられたのは、まさにこの60年代の終わりなんです。

グラフをご覧ください。CiNiiという学術情報のデータベース検索を使って、タイトルに「学生参加」という語を含む論文の数を数えてみました。これにより「学生参加」論の盛衰を、視覚的に表現することができます。そうすると、69年のところだけ飛び抜けて多くて、その後グッと減っちゃうんです。「学生参加」がまったく話題にならない期間がその後、70年代、80年代と続いていきます。そして90年代の終わりぐらいから、再び「学生参加」が話題になりはじめます。

この学生参加論の二度の流行というのは、文脈がおおいに違っております。皆さんはよくご存じでしょうが、60年代末の学生参加論は、大学の自治、すなわちその意思決定や管理運営に、学生がいかに参加すべき（でない）かという問題。学生たちは、自分たちは大学の構成員であるにもかかわらず、大学の自治的な運営から排除されているのはいかなるものか、と異議申し立てをしました。

日本の全国の大学でこういうことが問題提起され、かなりの大学で、学生が大学運営に参加する制度、それはもちろん不十分なものでありましようけれども、かなり実現されていくんで

す。ところが、制度的に実現したにもかかわらず、あるいはそれゆえにこそ、その後は、学生参加というのは問題にほとんどなくなります。

その次の90年代から出てくる学生参加論は何を問題にしているかといいますと、まず学生参加型の授業です。藤本先生のご報告でも触れられた、いわゆるアクティブラーニングというのも、参加型の授業スタイルのひとつです。とにかく一方通行の授業では、これからはもう駄目だと。学生がどうやったら参加してくれるのか。教師が上から目線で教え込むんじゃなくて、学生の主体的な学びを支援していこうと、そういう流れであります。

それから、授業評価への学生参加もあります。いまや教師も評価の対象なんです。藤本先生のお話でもランキングとかありましたけれども、教室の中でも評価があるわけです。「学生参加」という言葉は同じでも、60年代末が大学自治の文脈だったのに対して、90年代以降は教育改善の文脈で使われるようになっていくのです。

文脈は違うけれども、共通点はある。60年代末と、90年代から2000年代を比べますと、2つの時代はともに大学の危機の時代である、ということです。それまでの大学の「当たり前」が根本的に問い直された時代です。大学とは何か、それから大学と学生との関係はどうあるべきか、といったことを改めて考え直して、再定義しようという、そういう大きな動きのなかで学生参加論というのは出てきているんです。

二度目の学生参加論は、まだブームが終わっていません。2010年代も学生参加論の論文は量産され続けております。日本だけではなく、60年代末の学生参加論も、日本だけではなくでした。当時、欧米の高等教育先進国では、ことごとく大学民主化運動がおこりました。

とりわけヨーロッパ大陸では、大学民主化が徹底的に行われました。国立大学が多かったので、大学法という法律で、それまで「教授の自治」（学者王国）が圧倒的な権力をもって支配していた大学自治に、下級教師や学生、さらにはアカデミック・スタッフではない職員まで入れる。

学者王国の解体のために、学生に加勢して、政府や議会も動きます。こうしてヨーロッパの大学は70年代以降にガラッと変わっていきます。日本以上に徹底的に大学民主化（学者王国の解体）が進められたんです。ヨーロッパよりも学者王国の性格が弱かった日本の場合は、むしろ「大学の外部からやってくる危機」から大学の自治を守るための「教師と学生の学問共同体」をつくろう、という構図だった。教師はそれに応えてくれず、学生の片思いに終わりました。

大学民主化を実現したヨーロッパ大陸では、民主化の形骸化が起こります。ましてや民主化が中途半端だった日本ではなおさらです。そして学生参加とか民主化とかいうことは、いっさい話題にならなくなります。これが70年代から80年代のことです。逆にいえば、大学がとても平和に過ごせた時期なんです。

再び学生参加が話題になりはじめます。先ほど日本の例で挙げたのとは異なる背景があります。大学関係の方は聞いたことがあるかもしれませんが、ボローニャ・プロセスという、欧州高等教育圏の創設を目指した動きです。それまで国別に大学を置いて、それぞれの仕組みで運営していたものを、ヨーロッパ全体で共通のルール、共通のプラットフォームを整備して、相互に自由に人が移動できるように再編しましょうという取り組みのことです。

そのなかで、60年代末の大学民主化運動によってヨーロッパ大陸で制度的に実現していた学生参加を再評価しまして、ボローニャ・プロセスに参加する大学に対しては「学生参加を制度的に保証してください」と求めるわけです。形骸化していた学生参加に理念を再充填して、かつて作ってあった制度を再活用する。だから90年代末から2000年代にかけての、二度目の学生参加論も、日本とヨーロッパでは文脈が多少違うとはいえ、やはり世界的な同時性をもっているのです。

それで、レジュメの「2. 大学共同体像の二つの理念型」というところで、左側に60年代末の「参加の時代」、右側に「参加型の時代」を置いて、何がどう変化したのかがわかるように対応づけてみました。参加型の時代に「型」と

付けたのは、参加させよ！という権利要求としての参加ではなくて、手段として参加というように参加論の文脈が大きく変わっていることを示すためです。

4者問題としてとらえ直す

学生参加が話題になるのは、どちらも大学の危機の時代だと申し上げました。それと「大学の時間」の問題とをつなげるための補助線として、ここで『「他者をいかに制御するか」問題の入れ子構造」という論点を導入したいと思います。レジュメの「1. 学生参加論の二度の流行」の2つ目の論点として提示したものです。

私はパワーポイントを使わないものですから、今日皆さんに提示できる絵がこのグラフ1枚なんですけども、余白に、今から申し上げる4つの要素を書いていただきたい。大学、教師、そして学生、4番目は括弧つきですが——「社会」です。大学の危機とか、あるいは教師の葛藤というのは、大学・教師・学生・社会、それぞれの時間のずれとか、あるいは論理の違いによって起こっています。このいわば「4者問題」は、なにも今はじめて起こっているわけではなくて、大学が歴史的に始まったときからそうなんです。

私が「はじめに」で書いた、「大学の外部からやってくる危機」に対峙する「教師と学生の学問共同体」というスローガン——皆さんがよくご存じの日本の大学紛争／大学闘争で叫ばれたスローガン——は、「大学・教師・学生」対「社会」という大情況のなかに「大学・教師」対「学生」という小情況を組み込んだ構図になっている。これは4者問題があたかも「存在しない」かのように見せる否認パターンの一種です。

要するに、敵は大学の外（「社会」）にある。それは国家かもしれないし、独占資本主義かもしれないし、アメリカ帝国主義かもしれない。とにかく敵は外からやってくる。それに対して、われわれ学生は、学問の自由を守るために教師と連帯して大学を守る闘いに立ち上がらなければならない（「大学・教師・学生」対「社会」）と。ところが教師というのは、非常にだらしない存在で、学生が尻を叩いてやらないと目が覚めない（「大学・教師」対「学生」）と。そういう

論理なのです。

さきほども申し上げましたが、これは学生から教師に宛てた熱烈な片思いのスローガンです。当然、教師は結局学生の思ったとおりには動いてくれません。そんなだらしがない教師に対して学生は「裏切り者」などと批判するわけですが、もともと違う論理で生きているんです、学生と教師は。さきほど申し上げたヨーロッパ大陸の大学民主化運動では、「教師」対「大学・学生・社会」——学者王国を転覆させるための民主連合——という構図なので、日本よりは4者問題が見えやすい。少なくとも、教師と学生はお互いにとって他者であるという自覚があるからこそ、「他者をどう制御するか」が問題になるのです。

日本では、とくに戦後わずかでも「共闘」の成功体験があった日本では、お互いに他者という自覚が希薄で、「いつかは振り向いてくれるはずだ」という熱烈な片思いが、大学の危機を語るたびに繰り返されているのではないか。60年代末は学生から教師への片思い、90年代末以降は教師から学生への片思いです。

ちょっと藤本さんのご報告にふれたいと思います。いまの大学が置かれた困難な状況をすぐ明快に説明していただいて、そのことには何も文句はないんですけども、「4者問題の観点から、ちょっと立ち止まって考えてみましょう」と問題提起するために、あえて補足的なコメントを試みます。藤本さんは「物語」の始まりとして進学率の上昇、つまり量的拡大から話をされました。それによって、大学の本来あるべき姿（大学の本来性）が失われてくると。学生が増えて、教師も増えて、大学も増えて、量的に拡大してきたために、余計な競争が起こって——余計はいいすぎですね——、だから評価のなかで生き残りを図る淘汰の競争が始まっていると。ここまでは、とても明快なお話です。

じゃ、量的拡大の前はどうだったのと、ちょっと考えてみてください。でも、その歴史のお話を具体的にやり出すと、2コマぐらいはかかってしまいますので、結論だけ申し上げます。量的拡大の前は、学生と教師、それから大学と社会は、平和的に共存していたのかといえ、

そんなことはないんです。例えば、教師は学生をどう制御するのか。これは永遠の課題で、大学の起源とされる12世紀、中世イタリアのボローニャで学生組合と教師組合で大学が始まった当初から、ずっと教師たちと学生たちは、お互いどううまくやっていこうか、あるいは、どうやって相手を制御するかということで頭を悩ませてきました。

つまり、「量的拡大の前の大学の本来性」という考え方は、括弧に入れてほしいのです。現状の説明と課題を明確化するうえでは、それでいいわけですが、量的拡大の前に何か幸福な時代があったわけではなくて、つねに「他者をいかに制御するか」という問題に、教師、それから大学は直面し続けていた。その問題に取り組むなかで、大学は自分を変えてきている。という、何か外部環境の変化に対して、大学がズルズルと流され続けているかのようだけれども、何でもかんでも変わっているわけではない。何かは変わっていない。その変わらなさを担保しているのは、恐らく「教師の時間」だと思うんです。

大学教師の時間

ここで、藤田さんの「大学の時間」の話にまた戻ってきます。大学の教師というのは、学生に向き合う教育者であると同時に、学問に身を投じる研究者でもあります。研究者というときまた競争・評価にさらされているイメージがあるので、学者といったほうがいいかもしれません。学者というのは理念型としては、真理を探究し学問の発展に貢献する存在です。社会の発展ではなく学問の発展が第一義です。自分の学問が社会の役に立てばラッキー。いまは社会の役に立たなくなつて、そんなことでめげないのが学者です（笑）。給料が減らされたり、授業評価アンケートが低かったりとか、それはそれでヘコみますけれども、それは愚痴のネタにはなつても、じつは教師はちっとも焦りません。学問に身を投じる存在としては、本質的なヘコみではない。

大学の教師が焦らないのは、学者の時間を持っているからなのです。外部環境の変化に適応

するなかで、変わらなさを担保するもの、最終的に大学の中身を決めていくのは、中にいる教師たちの時間ではないかというのが、私が思っているものです。

教師たちがもつ学者の時間って、他の3者の時間のなかでは一番保守的なものです。研究の先端は目まぐるしく変わり前へ前へと進んでいきますけども、その研究を含むところの学問がもつ時間は、はるか何百年もさかのぼります。私の専門の社会学は比較的新しいので何百年もさかのばれませんが、それでも先人の格闘の歴史と、膨大な蓄積と、それから世界史の広がりの中で、自分たちは活動しているっていう自負があります。哲学なんかはもっとそうですね。

この辺でまとめたいと思います。再びタイトルに戻って、もう1回言います、「日本の大学、このごろ焦っていませんか？」——たしかに学長は焦っている。でも教師は焦っていない。それから、学生は焦っている。でも教師は焦っていない。焦らない教師の時間が持続する、その保守性とか歴史性というのが、結局、大学がこれからどんな危機にさらされようとも、変わらなさを担保する。教師たちは手を代え品を代え、自分たちの環境を整えて教師の時間を守ろうとします。絶対守ります。

私もたとえ今の大学をクビになったとしても、おそらく自分を雇ってくれるところを探して教師の自分を守るんです。教師たちは組織としての大学に身を奉げようという発想がありません。身を奉げるのは真理探究の営みとしての学問です。今いる大学がつぶれても、何の心の痛み……心は痛みますけれども（笑）、自分にとっては、仮の宿といますか、それが1つなくなっただけにすぎないんです。その楽天性がまさに希望でもあると。ちょっといい話になりましたでしょうか（笑）。今日の議論は、せっかく前のお2人がいいお話をしてくださったので、それと重ね合わせるかたちで問題提起をさせていただきました。私の話は以上です。ありがとうございました。（拍手）

黒宮：どうも井上先生、ありがとうございました

た。以上で、3名の方によるそれぞれの問題提起を終えました。冒頭に案内しましたように、いったん休憩を挟みます。その間に、お手数ですが、質問シートに記入いただければと思います。質問シートは、本日手伝ってくれている学生アルバイトの彼ら2人にお渡しください。では、これで前半部を終了します。ありがとうございました。

（休憩）

黒宮：では、10分の休憩も済みしましたので、後半部のディスカッションに移りたいと思います。3名の方の話を伺って、僕はいま、「さて、どうしたものか」と頭を抱えているんです。どれも面白い話であった分、どの問題から取りあげるべきか、整理するのに時間が欲しいところです。ですが、そういうわけにもいきませんので、まずは、来ていただいている方から頂戴しましたご質問、ご意見の中から、各20分の中では説明が省略された話など、追加の説明を要するものから3名の方に応えていただくことにしましょう。たとえば、最初の藤本先生でしたら、「大学の責任とは何か」を考える際に言及された映画『ハンナ・アーレント』の話ですとか、藤田先生でしたら、「満足度」と「幸福度」の相違についてなど、お願いできますでしょうか。

まずは藤本先生、いかがでしょうか。先ほど「大学の説明責任」の話の際に、映画に登場するハンナ・アーレントの大学の講義の模様について言及なさいましたが、いかがでしょうか。

藤本：まず私がタイトルの副題に『「アカウントビリティ」という責任回避』とつけています。「アカウントビリティ」は「説明責任」と訳されますけども、それを果たすことが皮肉にも責任回避につながっているのではないかと、いうことを込めてこの副題をつけ、お話全体として、そういうテーマで組み立てたつもりです。ですが、「アカウントビリティ」という言葉については、あまりお話の中で触れていませんでしたので、そのことについて補足したいと思います。

先ほど藤田先生のほうから数についての話が

ありましたが、アカウンタビリティというのは、数値化できるような、あるいは計画として載せられるような、そういう誰もが分かるような言葉や数字を使って、大学で行っている研究や教育を明示していくことを意味します。

今日は教育の話を中心にお話させていただきましたけれども、研究についても、研究業績と言った場合に、論文の数だとか、レフリーの有り無しによってポイントが付けられることがあります。そういうかたちで具体的な数字に落とせるもの。あるいは、PDCA サイクルのような分かりやすい段階を得ることによって、誰もがその問題や改善点がどこにあるのか分かるようにする。そういう言葉で大学の諸活動が語られている。そのように説明することが責任を果たすこととして理解されている、ということです。そこで、そうした状況について問題視するというか、そういう状況の中で見過ごされていることが何かなのか、ということを知るところから始めてみたいと思い、「アカウンタビリティという責任回避」という副題をつけました。

お話の最後に『ハンナ・アーレント』の映画を話題にしましたが、この映画は、説明責任とは異なる責任のあり方を考える上で参考になる。そう申し上げましたのは、ハンナ・アーレントは映画の中で、ホロコーストの中心となったアイヒマンの裁判を傍聴して、アイヒマンレポートというものを書きます。そのレポートのなかで、アーレントは、アイヒマンが極悪人だったから、ホロコーストが起こったわけではない。そうではなく、彼は単に思考を停止してただけだった、ということを発表したわけです。こうしたアーレントの見解は、多くのユダヤ人にとっては、受け入れがたいものだった。アーレントに親しい友人でさえ、アーレントはナチスの側にたつてものを考えている、と非難し、離れていってしまふ。誠実に思索し、考え抜いたことを結果が、社会的には反発を買ってしまう見解であった、ということです。

先ほども言いましたように、この映画は別に「大学」が主題というわけではないんです。ただ、アーレントはそのような状況において、自分の考えたことは、こういうことだったんだという

ことを、大学の講義という場で、学生を前にかたる場面があります。その講義が始まる直前に、「こんなことを主張する人は、この大学から出ていってもら。教授会でそういうふうな取り決めになりました。アーレント先生はもう辞めてください」といったことを同僚の先生から言われます。それに対してアーレントは、「いえ、私の講義にはたくさんの学生が集まっています。私は辞めません」と言い返し、その講義を始めるわけです。

つまり、アーレントが一見すると反社会的であるようなことを学生に向けて語る、大学は、そういう場を与えている。そして、学生はそれを興味津々な表情で聞いている。こうしたことに着目したとき、私たちが、大学と社会の関係について、そして大学の責任の在り方を問うときに、一つの手がかりがみえてくるのではないかと、というふうに思った次第です。

映画をご覧になってない方には、少しちょっとネタバレらしきみたいところになってしまって申し訳ないですが、私の話よりも実際見たほうが面白いので、ぜひ興味を持った方は、ご覧いただければと思います。

きっと、この後の議論にも、先ほどの井上先生のおっしゃった「学者の時間」を考える上でも、アーレントの思索のあり方と、社会のかかり方を、手がかりにできるのではないかと、いうふうに考えています。

藤田：私のほうからは二つのご質問にお答えさせていただきます。一つ目は、「社会を生きぬく力とか、卒業後の人生を生き抜く力なんていう言葉が出たけども、結局それってどんな力なんだ。また、そんな力は大学で教えることが本当に可能なのか」というご質問です。これは誠にごもっともなご指摘で、もちろんそのような力を定義するのは非常に難しい。

まず出発点として見誤りようのない点は、現在の大学がとにかく目の前の就活に対していかに対処するかということによって規定されてしまっているという現状認識であり、SPI 試験というものの内実を見てみたときに、これで果たして本当に現実の社会の中で生き抜いていく

「社会人基礎力」を養成することになるんだろうかという素朴な疑問です。

そして、そのような現状認識と素朴な疑問をもって、現在測られているものと本来測られるべきものの間にちょっとずれがあるんじゃないかということを指摘する意味で、「卒業後の人生を生き抜く力」というふうに言わせていただきました。

これは最初にお話しした「心の時間と時計の時間」の話と実は同じです。心の時間というのは測れない。にもかかわらず実際に存在する。それは皆さんがそれぞれお感じになっていることであって、それを何らかのかたちで測る努力をやはりしていかなければいけない。持続という概念は、心の時間を測る第一歩なのです。

この心の時間は、待ち遠しさ、じれったさのなかに意味を見出すような時間であり、大学で言えば、古典をじっくり読むときの時間であり、哲学するときには体験される時間です。昨今、ファストフードに対してスローフードの重要性が言われるようになりましたが、ゆっくり考える「スローシンキング」の時間です。

二つ目のご質問は、満足度と幸福度の違いについてです。これは快樂 (pleasure) と歓喜 (joy) と言い換えても構いません。私はときどき、非常勤の哲学の先生の授業をこっそり覗きに行ったりするんです。後ろのほうで見ています。そうすると、大教室の後ろのほうに座っている学生の中には、全然興味なさそうにスマホをいじっている者がいたりする。そういう学生でも、授業の終わり近くに先生がミニッツペーパーを配って感想を書かせると、「～が非常に興味深く感じました」とか書いてる。そういうことって結構あるんです。こういう学生は、授業評価アンケートにも適当に「満足」って書くかもしれない。たしかに、勉強もせず楽に単位を取れば、学生はある種の快樂を得て“満足”かもしれない (笑)。

けれども、果たして彼 (彼女) はそれで喜び、歓喜を得られるんだろうか？ 幸せなんだろうか？ 数字に表れてくるものと、本当に学生が感じていることの間で、乖離してる場合があるんじゃないだろうか。満足度って言ったときに、

測れてないものってやっぱりかなりあると思うんです。今の学生ですから、どういうふうに答えたら先生が喜ぶとか、そういったことをよく分かってるんですよ。それに踊らされてはいけないとか、それで測りきれないものこそ測らないといけないんじゃないかっていう気がするんです。

ではその幸福度をどう測るか。例えば、授業で学生にマイクを向けて、双方向でやろうとする。これはいま普通ですよ。でも、マイクを向けてもしゃべらない子って多いんです。従来の測り方だと、「しゃべらない＝積極性がない」ということになる。ところが、今どきの日本の学生って、人前でしゃべることはできないんだけど、ミニッツペーパーとか書かせると、授業の感想や自分の考えをけっこう書いてきたりもする。そうすると、学生を評価するときに、公開性の中での測り方だけじゃなくて、「こっそりだったら言えるよ」っていう学生のひそやかな声も拾える測り方をすることによって、何とか学生の引き出しを少しでも多くしてあげるってということが教育において大切になってくるのではないかな。

ちなみに、その場合、やっぱり書かせっぱなしだと駄目ですね。それを次の回にフィードバックしてやる。「君たちの中にはこんな意見を持っている人もいたよ」っていうのを実際コピーして配ってみると、けっこう学生たちは喜んで。「ああ、自分の声が拾われた」っていうことで、またそこから授業に入っていけるということがあるわけです。

ちょっとまたパワーポイントを写させていたきたいんですけども、こうしてミニッツペーパーに書かせるという作業を毎回辛抱強く行なって、学生たちの成長を待っていると、(画面を指さして) 書く分量がかなり違ってくるというのが分かりますか。明らかに分量が増えてくるわけなんです。学生たちが「満足である」と口に出すかどうかではなく、喜びや知的好奇心をもって授業を受けている姿自体から、彼らが書く分量をもって彼らが「幸福である」か否かを測る。

授業に興味を持っているとか、授業の中でい

ろいろ考えさせられたっていうのは、彼らが「言っていること」じゃなくて、「実際にやっていること」の中に現われてくる。そして、こういうことを数量化することも不可能ではないと思うんです。彼らが授業から何を得られたかがいわゆる得点のような形で計測されなかったとしても、授業を通して確実に自分が変わってきていると思える、その確信を何らかの形で測ることは可能だと思うんです。

もちろんそういった計測方法も、すぐに形骸化してしまう。例えば、じゃあミニッツペーパーを書く分量が多くなれば、それで学生たちは“幸福”なのかというと、学生たちは、空気を読もうとしますから、喜びはさほど得ていないんだけど、満足したふりをするようになる。そういうイタチゴッコ的なところもあるんですけども、ただ、やっぱりいろんなかたちで彼らの幸福度を測る努力はしていかないといけないのではないかと。以上が、満足度と幸福度という言葉で申し上げたかったことです。

すみません、長くなりました。以上です。

井上：「教師は焦っていない」というと、「いや教師だって焦っている」という人が出てくるんじゃないかと思ったら、やっぱりコメントいただきました。ありがとうございます。教師の置かれている状況が、近年厳しさを増してるのはたしかなのです。

例えば、任期制による採用が一般的になり、とくに今、大学院を修了してから大学にポストを得ようとする、任期付きとか、プロジェクトの期限付きの特任助教とか、とにかく不安定な期間がすごく長いんです。

なので、そういう意味では、焦っているんですけども、でも、こんなに困難な道なのに、次々と優秀な若者が研究者を目指してきますよね（これは大学院重点化で大学院生の数を増やしたのとは別の問題です）。途中で進路を変更して、ほかの道に進む方も多いんですけども、普通の経済社会の論理だったら、こんな不安定で困難な道よりも、ほかに身分が安定して毎月お給料がもらえる職があったら、そっちにホイホイ移ると思うんですけども。どうして大学教師

の世界だけ、あえて困難な道を歩むんでしょうか。心の一番奥底で、社会の焦りとは違う時間を生きようとしていると想定しないと、これは説明できないんじゃないかと思うんです。こういうことを言うと、「おまえは今の若手が置かれている深刻な状況を理解していない」とお叱りを受けることは重々承知の上ですが、ここでは「大学の教師とは」とか「学問とは」という、そういうレベルの話をしていますので、こういうお答えになります。

それから、業績本位の研究ばかりで、学問にじっくり取り組めていないと。もちろん論文を書くことは大事です。学問というのは、過去の蓄積を受け取るだけではなくて、それをふまえて自分でも生産して、その蓄積に少しずつでも貢献していくという、そういうプロセス全体を指すからです。しかし、評価の数字がひとり歩きして、論文の点数だとか、どのぐらい有力な雑誌に載せたとか、そんなことばかりが要求されて、ちっとも落ちついて学問ができないと。そういう実感はもちろん私も分かります。

上の世代の先生の話をお聞きしていると、自分のときは査読論文1本だけで就職できたとかっていうわけです。それにひきかえ、私たちは査読論文を何本も書いて学位を取ってもなかなか就職できない。腹が立ってしょうがない。

それはたしかに腹立たしいけれども、だからといって学問を放棄したりはしません。業績至上主義のプレッシャーを受けながら論文を書いている、これは学問本来の姿からはちょっと外れてるな」という、良心の痛みを感じます。この良心の痛みがないとちょっとどうかなと思うんですけども、これがあるならば、教師の（学者としての）時間を、やはり皆さんお持ちなのではないのかなというふうに思います。

それから、あと1つ。社会の役に立つとは？という問題に、報告のなかでは答えていなかったのを補足します。レジュメに示した「他者をいかに制御するのか」の問題の中で、制御という言葉を使っています。これは何か教師が学生に言うことをきかせるとか、大学は教師に言うことをきかせる、というふうに見えるかもしれませんが、「制御」には、支配するとか、上か

ら押さえつけて言うことをきかせるという意味のほかに、対象の働きをよくする、ポテンシャルを引き出していくという意味もあります。

「教師は学生をいかに制御するか」といったときに、言うこときかせるということじゃなくて、どうしたら目の前の学生のポテンシャルを引き出せるか、という側面があります。藤田先生もさきほどのお話にあったように、めちゃめちゃ引き出していますよね。誰から何も言われないのに、教師はやる。教師はやっちゃうんですよ。目の前にいる学生を自分が知っている学問の面白さに引き込んで、そして彼らに少しでも知的な営みに参加できるようになってほしいと欲する。それで給料が増えるわけでもないんですけども、やっちゃうんですよ。それは多分教師の（教育者としての）時間だと思います。

「大学は教師をいかに制御するか」も同じです。大学も教師に言うことをきかせるばかりじゃなくて、どうしたら教師が本質的に持っている、教えたがるポテンシャルとか、研究したがるポテンシャルを引き出して活かしていくか。企業経営と同じですね。良心的な学長先生なら、そのことに日夜心を砕いておられるはずですよ。教員のポテンシャルを引き出すことは、おのずと学生のポテンシャルを引き出すことにつながるわけで——これができる学長さんは素晴らしいと私なんか思います。

あと「社会は大学をいかに制御するか」。いまの大学はいろいろな圧力にさらされているので社会に対して被害者意識をもってしまいがちなんですけども、それは社会にとってもいいことではない。学問というのは、社会の論理とは違う独特の論理、そのときどきの政治とか経済の論理とは異なる論理で、ここまで続けてきています。それははるか昔の過去から積み上げてきて、未来のはるか先に目を向けています。そのような学問からどうすればポテンシャルを引き出すことができるのか。これは大学に一方的に要求するものではなく、社会の側も引き受けるべき課題でもあると思うんです。

そうすると、社会に責任転嫁しているように思われるかもしれませんが、それは大学教師に対してもいえることです。教師も大学や

社会に対して被害者意識をもつだけでなく、こうすれば大学（あるいは教師）のポテンシャルをもっと引き出せます、皆さんのお役に立てますよ、と働きかけて、自分たちをもっと活かすように、社会のポテンシャルを引き出す。そういう発想も必要なのではないのかなというふうに感じております。補足でした。終わります。

黒宮：進行が拙いからなのですが、残り時間が少なくなっており、僕が焦っていますけれど、もう一つ、今度は僕から3名の方に聞いてみましょう。

前半部の最後に発表された井上さんが、話の最後に、藤本さんと藤田さんにあえて対立する形で問題提起をしてくださりました。藤本先生に対しては、学生や教師、そして大学の量的拡大により大学間の競争が起こり、大学が評価にさらされて淘汰の競争が始まっている、それにより、大学の本来性が失われてしまったのではないかという、大学について語る際のある種のストーリーについて、本当にそうなのでしょうか、という問題提起がなされたかと思います。たしかに、僕も冒頭で「違和感」について言及しましたが、「違和感」を抱くということは、学生時代なのかどうかはわかりませんが、いつの時代だかの大学を「本来的なもの」と想定しているのかもしれませんが。井上さんによる問題提起は、それをどのように考えたらよいのか、ということだと言えます。そして、そのつづきで、井上さんは藤田さんに対する問題提起もしてくださりました。井上さんによるお二方に対する問題提起に応えていただく形で議論を進めていくことにします。井上さんが最後に話をされたのは、いまのような内容で間違いありませんよね。いかがですか。

井上：はい。ありがとうございます。

藤本：そうですね、たしかに私は、「社会に開かれた大学」がどこから語られ始めているかと考えたときに、進学率の上昇という量的な拡大から始まっている、という形で話をしました。ただ、大学が墮落しているような筋書きである

からといって、それ以前には何か理想的な状態があったと考えているのか、というところ少し違います。それ以前に何か理想的な姿があって、そこへの回帰が大事だ、というような話ではなく、井上先生におっしゃっていただいたように、学生と教師の関係のあり方の葛藤は、たとえば旧制高校の時代でも、どの時代でも常にあったとは思いますが。

ただ1つ、ちょっと藤田さんへの質問を横取りになるかもしれませんが、「学者の時間」を考えたときに、やはり時代的な変化がみえてくると思います。私の発表のなかで、今の大学改革の動向には「研究から教育へ」という流れがあるというお話をしました。その流れのなかで、大学で「教育」するにあたって、自分の学問の時間を背後に押しやって「学生の時間」に則していくことが求められているのではないかと、思います。つまり、「学者の時間」というのは、確かにあるかもしれないけれども、今の大学では、進学率が低かった頃の大学に比べ、学者の時間を生きづらくなっているのではないかな、と思うわけです。

たとえば、私はいま東京大学で大学院生向けのプロジェクトを手伝っていますが、そこでは、これからの大学教師は、大学に就職したら研究だけではなくて、シラバスをきっちり書いて、授業デザインをしっかりと、「教師の時間」を生きなければいけない、学生の学びがどう促進されているかをきっちりと見ていかなければいけない、そういうことを教えられるような時代になっています。そのように、自分の学問についてもまだ途上にいる大学院生の段階から、そういう意識を持つことを教えられている現状を考えると、これからますます「学者の時間」を保ちづらくなってくるのではないかな、と思うわけです。

黒宮：井上さんによる藤田さんへの問題提起は、「変わっていないものは何か」ということを考えてみよう、というものでした。井上さんによると、それはおそらく「学者の時間」ではないかということでした。ただ、いま藤本さんは、「学者の時間」が「学生の時間」に即応するよ

うに時間のあり方が変わってきてしまっているのではないかと、いうことでした。井上さんか藤田さん、どう考えますか。

藤田：藤本さんと私の問題提起に対する井上さんのご指摘は指導教官のように（笑）的確で、もっとちゃんと深めなさいという。藤本さんに関して言えば、物語の始まりについて、もうちょっと慎重に描かないといけない、と。私に関しては、「大学の時間」というふうに大きく投げ出したけれども、大学の時間と言っても内部ではさまざまにズレをはらんでいて、「学長の時間」「事務職員の時間」「学生の時間」といろいろあるだろう、と。これはまったくおっしゃるとおりで、そういうふうにも最初から慎重を期して言うべきでした。そのずれの中で大学というのが動いていて、だから大学の時間といっても複数的であるということは、本当にそのとおりであると思います。

さて、問題になっている「学者の時間」ということなんですけれども、「研究者」という言葉、それから「学者」という言葉、それから「教師」という言葉、それぞれにやはり違う。ですから、私たちが例えば、どれか一つの時間だけを生きているのではなくて、複数の時間を生きている。だから、大学が複数の時間を持っているというだけではなく、私たち大学教員自身も複数の時間を生きているんです。

これはちなみに、もっと話を厳密にするなら、学生の時間といたって、学生が学生として生きている時間もあれば、アルバイトもバイターとして生きている時間もあつたりする。サークルに行けばサークルの時間を生きているわけですし、それぞれの中で実はズレをはらんでいて、その中で生きているわけです。

それで、先ほどのご質問、「学問をやっていないんじゃないかって気がする」という点ですが、若手が置かれた非常につらい状況といますか、私たちも比較的若手ですから（笑）、そういう状況を生きてきたわけです。

シンポジウムが一番最初に、黒宮さんが「余計者」という言葉を使われましたね。私は、大学教員というのは“河原乞食”みたいなもの

だ、芸人みたいなものだと、どこかで思っているわけなんです。

学者というのは一般に、自分が書きたいことを書いておられると思われておりますし、事実そういう部分が大いですが、しかし同時に、時代や社会の制約の中で書いている部分もあるのではないのでしょうか。

例えば、今「ひな壇芸人」という言葉があります。若手芸人たちがひな壇に並んで瞬発的に面白いことを言わないといけない。彼らの力量はその瞬時のレスポンスの面白さで評価される。あるいは、『レッドカーペット』という番組がありましたが、一分間でネタをやって、一分間で笑わせなければいけない。これは、さっき話が出た、短期間でたくさん業績をつくらねばならないという論文乱発状態と非常によく似ているわけです。私たちも今まさにここで実際そういう、瞬発力で勝負する（笑）というようなことをやっているわけです。これを拒否したらどうなるか。「十年に一本、しかし素晴らしい論文」という昔風の在り方に戻れるかというと、これはもう戻れないと思います、おそらくは。

したがって、ここ十数年ないし数十年というスパンで考えたときには（これが藤本さんの視点だと思いますが）、たしかに「学者の時間」に憂うべき変化がある。

他方で、そもそも芸人の歴史、ショービジネスの歴史というものは、状況に応じて、その状況の中で、自分がやりたいことと折り合いを付けながら、自分のやりたいことも実現させつつ、しかし時代や社会のニーズにも合わせていくという、芸能の歴史や広く芸術の歴史とはそういうものであったのではないのでしょうか。

学問も同様で（これが井上さんの問いへのお答えになりますが）、さっきの「象牙の塔」という言葉のように、何となく社会や時代のニーズとはかけ離れてあるというふうに思われるかもしれませんが、恐らくそうではなくて、社会的・時代的制約と戦いながら、妥協点を見出しながら、その中で自分のやりたいことも実現していくという、きっといつの世もそういうものだったのではないかと思うんです。

だから、学者の時間というのが社会と切り離

されているっていうことではなくて、実は学者の時間もまた、一周ぐるっと回って、やはりどこかで、学生の時間も含めた社会の時間と、ずれをはらみつつも、呼応しているということがあるんじゃないかと思っております。以上です。

井上：もう上手にまとめられてしまいまして、いや、もうほんとにおっしゃるとおりだなと思いました。学者の時間が非常に生きづらくなっているというのは、そのとおりです。

私も帝京大学は2年目なんですけども、3年目の終わりに審査があるんです、雇用を継続するかどうかの。だから私自身、いま任期が付いていて、どうなるんだろうとちょっと今からドキドキしているんです。しかし私には学者の時間があるので、このドキドキ感はやその身分不安定な労働者とは違うんじゃないのかなと思います。どこか何か浮世離れた楽天性みたいなものがありまして、これで帝京大学をクビになったら、また誰か拾ってくれないかなと。さきほどの藤田先生の芸人のお話じゃないですけどね。えー、一生懸命仕事してたら、「よし、じゃあ京都文教大学に来るか？」（会場笑い）。

黒宮：先ほど「学長の時間」は忙しいものになっているということでしたが（笑）。

井上：もう私、学長のために働きますよ、拾っていただけるのであれば（笑）。こういう、まあ、冗談ですけども、たしかに組織に属しないと安定した生活が送れないという問題はあるんですけども、完全には属していない。そこが救いでもあるのですが、社会一般から見ると、浮世離れた無責任さ、というふうに思えるかもしれません。

でも無責任じゃないんですよ。目の前に学生がいたら、これはやっぱり教師たるもの全力で向き合います。どうしたら彼らの興味をこちらに引き付けて、自分が面白いと思っている学問を分かってもらえるかなって、全力で考えますし。自分のテーマで書いた本が、「いま」は売れなくても、たぶん10年後には再評価されて売れるだろうとか、あるいは「いま」は20人

ぐらいしか興味を持ってもらえないけれども、20年後にはブームが来ているぞとか。そういうことを考えて仕事をするんです。これは無責任とは違います。「社会の役に立つ」といったときの時間感覚が違うのだと思います。ということで、あんまり藤田さんに有意義な付け加えはないんですけども、そこから連想したことを話してみました。

黒宮：ありがとうございました。いま時計を確認しましたら、もうほとんど時間がありませんね。ただ、最後に僕から3名の方にどうしても聞いておきたいことがあります。僕は冒頭で「余計者」という表現を用いました。それに対して、こんなふうに言うこともできますよね。だったら山奥にでも一人引っ込んで寿命が尽きるまで生きていけばいいじゃないか、と。しかしながら、そうはいきません。というのも、近年、社会のど真ん中になかったはずなのに、だんだんと真ん中の方に連れ出されたのか、自らすすんで移動してきたのかはわかりませんが、いずれにしても、大学は社会の真ん中に位置していると考えられています。そんななかで、僕が言うように、「余計者」という存在であることを自覚するとすると、「余計者」が社会のなかで生息することが許されるとするならば、もっぱら私的な関心のみで専門研究をするとかではなくて、何かしら真面目に学問する姿勢くらいは必要なのではないかと考えたりもします。

そこで、残り時間も少ないなか、最後にとんでもない大きな問いを、と後から叱られてしまいそうですが、3名の方に、皆さんにとって「学問する」とはどういうことか、「学者の時間」との関連で答えてくださっても構いません。最後に、本質的とも言える問いに答えていただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

藤本：「学問するとはどういうことか」という問いをいただいて、質問カードにあったフロアからの質問をひとつ、思い出しました。それは、私が発表の最後で話したことに関係していました、つまり「学生にとっての社会」を考えたときに、友人や家族など、さまざまな関わりの中

で生きるというのは、どういうことなのか、という、この問いへの応じ方を考えていくことが、大学の責任を問う1つの糸口になるのではないかと、そういうお話をしました。

質問カードには、この問いについて、「藤本さんはどう答えるんですか」ということが書かれていました。私は、大事なものは、問いへの答えを用意することではなくて、その問い自体を問い続けることではないか、と思うのです。というのも、どこに重要な問いがあるのか、ということ自体が、問いの在処が、非常に見えづらくなっているからです。

例えば、今日の私の発表のテーマでも、私は、大事な問いの在処を示すことを重視しました。大学と社会の関係を問う場合にも、一般のFDなどでは、評価の方法とかその妥当性とか、そういうことが問われています。ところが、今の大学の責任を、社会に対する責任を、きちんと突き詰めて考えていった場合には、FDなどで問われていることとは違う問いが重要になるのではないかと考えたわけです。

学問というのは、時代が変わっても変わらない問い、つまり時代を超えた問いがどこにあるのかということ、それぞれの分野において示していく。その問いの在処を示しつつ、その問いを問い続けることを可能にします。そのように、時代を超えた問いを問い続けるということが、学問の1つの社会的な役割ではないかと考えられるわけです。

もちろん、その問いに答えられないから、役に立たないとみなされることもあると思います。けれど、その時代においてその問いの有用性が分からなくても、時代を超えて問われ続けてきたということを重視し、その問いを保ち続けていこうとする。つまり、学問とは、時代を超えた問いを問い続ける場である、と私は考えているということです。

こうした考え方は、『古典を失った大学』のなかで扱ったアラン・ブルームやレオ・シュトラウスの考え方が下敷きになっています。ですので、もっと詳しくお知りになりたい方は、ぜひ本を手にとっていただければと思います。

以上です。ありがとうございました。

藤田：「学問とは」ということですが、さきほどの芸人とのアナロジーによってお答えしてみたいと思います。あらかじめ断っておけば、もちろん学者と芸人の間には違いもたくさんあります。感性というところに訴えるのか、それとも私たちのように論理ですとか、理性、あるいは論拠というものに基づいて何かやっていくのか、そういったことをはじめとして違いは確かにたくさんあると思います。

けれど、共通点もたくさんあると思うんです。二つほど挙げてみます。第一に、学問にもお笑いにも、やっぱり自分が面白いと思うことを、ほかの人にも面白いと思ってもらいたいということが、原則としてまずあるということです。

考えてみれば、お笑いというのは、非常に奇妙な活動ですね。人の前で何か面白おかしいことをしゃべって、それが商売として成り立つという。そんなことがあるんだろうかと思うけれども、本当に奇跡的なかたちで成り立っている。もちろん芸人稼業は、先ほど井上さんが触れられた学者稼業同様、非常に不安定なもので、なかなか続かない。しかし、そこを目指す若者たちは後を絶たない。

学者もそうですよね。特に哲学なんて、「時間とは何か」「生きるとは何か」なんて考えて、物を書いて、学生たちにしゃべって、それで生活している。本当に奇跡的な仕事です（笑）。

第二に、先ほど「社会的役割」や「責任」という言葉が出てきました。私は常々、哲学者の観点からすると、「責任を引き受ける」という考え方は、哲学という学問とあまりそぐわないのではないかというふうに、どこかで思ってるところがあるんです。

「責任を取る行動的知識人」という考えにはそれなりに意味があるとは思いますが、どこかで責任ということと“斜めに対峙する”必要を感じるんです。もちろん責任について考えるだけけれども、責任を取るって言い切れない。そういうどこかちょっと歯切れの悪さがあるというか、中途半端さが残るというか、そういう態度のほう哲学者としては実は正しいんじゃないか。正しいっていうのも変ですけども。責任を取ると言った途端に、その問題設定

の中に絡め取られてしまう。その問題と真正面から対峙してしまうと、そこから抜け出す方途を探せなくなってしまうというか。

むしろ、そういう問題設定でいいのかということ問い続ける。哲学というのは、簡単に言えば常識を疑うということですから、「責任をとる」と言ってしまうと、どうも哲学者としては居心地が悪い気がする。ですから、藤本さんは「責任を問う」と仰いましたが、この言い方であれば、私はしっくりきます。責任と言っているけれども、その責任って本当に取れるものなのかなという、そういう問いかけです。

最近、芸人さんがツイッターなどに書いた発言で責められるとか、そういうアカウントビリティが本当にいろんなところに求められる。芸人というのは起源からすれば“河原乞食”で、社会の隅っこ、端っここのほうにいるマイノリティだったわけです。それがいつの間にかテレビで司会なんかも任されて、非常に責任ある立場ってということになりつつある。

これはさっき黒宮さんがおっしゃった、学者や大学が妙に社会の真ん中のほうに来ちゃってるということとよく似た現象ですね。これに対して、少なくとも哲学という学問は、責任に対してどういうかたちで対峙するかということ、を、「大学の時間」を生きながら、つまり回り道をして、道草を食って、スローシンキングをしながら考えていかないといけないんじゃないかというふうに思っています。すみません、以上、私なりに「学問とは」という問いに対して一応のお答えをしたつもりです。

井上：学問するとはどういうことか。…すごい難しい。そうですね。私、いまの職場で大学1回生向けの演習のテキストを作っておりまして、そこで「学問とは何か」ということを2ページぐらいで説明しなきゃいけないんです。そこで考えたことをお話します。

「学問とは何か」という問いを、「学問はどうやって行われてるのか」と言い換えてみます。1人の思想家とか哲学者が——哲学者っていうとちょっとあれですね——「余計者」が暗い穴倉に閉じこもって、孤独に考えて何か閃いたと

かって、いいことを思いつくみたいな、そういうのが学問ではないんだということを、最初に私は書いたんです。

もちろん学問のなかでは、孤独に考えて閃く局面はあります。しかし学問というのは、通常想像される社会的な活動よりも、すごくつながりの範囲が広いのです。同時代に生きている研究者たちとつながると同時に、過去、それから未来の学問に携わる人たちにつながる。そこでできる共同体の範囲がメチャメチャ広い。学問は、まず、そういう共同事業としておこなわれる。

それからもう1つは、今また芸人さんの話が出ましたが、とくにお笑い芸人の世界は、次々と新しい人が出てきては次々と消えていくのに対して、学問は消えないんです。どんなにつまらない学問でも、論文に書いたらもうそれは消えません。ずっと歴史的に蓄積されていきます。学問は、共同事業としての人のつながりと同時に、共有財産としての歴史的な蓄積を持っているわけです。通常の経済社会の活動とはちょっと比較が難しいぐらい、学問は広いものであり、深いものであり、大きいものなんだと。

そのうえで「今の社会は、このポテンシャルをどれだけ引き出せていますか」と学生に聞きたいのです。学生は最初はポカンとするんですけども、4年間を通じて、だんだん「学問ですごいな」とわかってくる。この中には想像を絶するほどいろいろなものが詰まっている。自らそこに入り込んでポテンシャルを引き出してみたいと、学生に思わせたい。私にとって学問というのは、圧倒的な広がりや歴史と蓄積であって、社会の役に立つかどうかとかいう次元を超えちゃっています。今の観点からは役に立たないようなものが膨大に含まれているんでしょうけれども、そういう社会の論理とは違う論理で人を惹きつけている。私もそれにとりつかれて学問をやっております。以上です。

黒宮：最後にすみませんでした。ただ、皆さんに尋ねたからには僕も答えないといけないのじゃないかな。ですが、藤本さんが話されたことだと思いますが、「問いを問い続ける」という姿勢を僕も実践することにして、「宿題」とさせ

ていただきます。おそらく、大いに頭を抱え、学生や同僚の先生などに議論を持ちかけてしまうのではないのでしょうか。それを「学者の時間」と呼ぶならば、そうした活発に議論する文化があるかないかが、大学の中身を決めていくのだと僕は考えます。

ちょうど終了予定時刻をすこし過ぎました。まだまだ議論を尽くすには及びませんが、以上をもちまして後半部のディスカッションを終了したいと思います。ただ、おそらく、僕らだけでなく、来てくださった皆さんのなかにも、まだ議論し足りないという方がいらっしゃるのではないかと思いますので、このつづきは本学が借りております6階の第2講義室へ移動し、雑談を交えながらやりたいと思います。

その前に、シンポジウムの終了に際して、本日非常に楽しみにしてくださっていた本学副学長の平岡聡が、みなさまに閉会の挨拶をいたします。平岡先生、お願いいたします。

平岡聡：失礼いたします。タイトルは「日本の大学、このごろ焦っていませんか？」ということで、井上さんのほうからご指摘ありましたが、学長は焦っているけれども、教師は焦っていない、と。私は副学長という立場ですので、右半分は焦ってますけども、左半分は焦っていない。ねじれた時間を現在生きているのかなという感じがいたします。

今日、若手の研究者の方に来ていただいて、ほんとに3人共それぞれ持ち味、個性を生かしてプレゼンテーションをしていただきました。僕も聞いてて楽しかったです。若干こじつけになるかもしれませんが、3人の発表を聞かしていただき、共通のキーワードとして、僕は「相対化」ということを挙げたいと思います。「当たり前を疑う」ということでもいいかもしれません。

藤本さんの発表では、社会に開かれた大学の物語の外へということでしたから、社会に開かれた大学っていうものを、相対化してお話いただいたと思います。それから、藤田さんの発表においては、2つの時間、測れない時間で測れる時間を相対化していただいたのかなと。それ

から、大学の数値化、いろんなことを数値化していくことがあります、その数値化も常識的な視点を相対化して、提示していただいた。

それから、井上さんの発表におかれましては、本当は言いたいことがあったのでしょうかけれども、前の2人の発表を相対化していただいたということで、何となくこじつけで相対化とか、当たり前を疑うと、そんなことが僕の頭に今日お話を聞かしていただいて浮かんだということです。

それを踏まえて言いますと、私も副学長という立場ですので、文科省政策はどうだとか、あるいは、学生のニーズはどうだとか、社会のニーズはどうだろうかということで、ほんとに目先の問題の対応で汲々としているというのが実情でございます。

そんな中で、今日のお話を聞かしていただいて、そういう自分の立ち位置を相対化できました。「大学の本来の存在意義ってなんなの？ 大学教育の本来の意味ってなんなの？」ということをもう1回考えさせてくれる、そういう貴重な時間を今日は僕は持てました。本質的なくそもそ論＞なんて、悪い意味で使われることもあるかもしれませんが、今日は＜そもそ論＞に立ち返って、もう1度フレッシュな気持ちで大学、あるいは大学の教育って何だろうかということを、考える機会を私自身持てたと思いますし、会場にお越しの皆さんも、そういう時間を過ごしていただいたんではないかな、という気がいたします。

ですので、ある意味、ほんとに耳が痛いなどということもありました。うちの大学も開かれた大学なんて言っていないながら、ちゃんと大学の本質を踏まえて運営できているのかなということもありました

が、しかし、一方で、ある種の何か心地よさのようなものを今日は僕は感じさせていただきました。もう1回フレッシュな気持ちで大学を見つめ直してみようかなという気持ちになれたのも事実でございます。

こういった貴重な機会を設けていただきました本学の人間研究所所長、依田先生、本当にありがとうございました。それから、今日のコーディネーター・司会、黒宮さん、本当にありがとうございました。水面下でかなりやりとりしていただいたみたいで、ご苦労があったんだと思います。謝意を表したいと思います。

それから、職員の立石さんも、休日にかわりませず、ご出勤いただいてカメラを回しているということで、皆さんに感謝をして、最後は閉じさせていただきたいと思います。ほんとに今日はありがとうございました。(拍手)

黒宮：平岡副学長、ありがとうございました。では、以上をもちまして、本日のシンポジウムを終了したいと思います。皆さん、長時間お付き合いくださり、ありがとうございました。そして、藤本さん、藤田さん、井上さんも、非常に面白い議論を提示してくださり、ありがとうございました。(拍手)

